

とある副官のお話

成宮

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

一刀くんとは別にやってきた人が劉備軍で副官やつてるお話

ネガティブ・キャラ不快等あるので苦手な方はバックお願いします

宣言しておきますが、私は劉備軍が嫌いというわけではありません

ただいろいろ想像して1番あれだったのが劉備軍であっただけなんです

*6話一旦削除させていただきました

自分自身で納得ができるものが出来上がりましたら上げ直したいと思います

目次

とある副官のお話	1
葛藤	25
平穏と不平等	41
虎の尾を踏んだどころか噛み切った	63
自業自得	84

とある副官のお話

「総員、関羽様に近寄る敵を排除しろ。目の前のもの全て、たたきつぶせえー」

その叫びに次々と周囲にいた兵達が呼応する。その部隊はまるでひとつの生き物のように一体となつて戦場を駆け抜ける。

その先頭を走る男は獣のように嬉々とした表情を浮かべ、ドス黒く変色したラージクラブを猛然と引きずり追いつがる。敵は余りにも奇異で、現実離れた姿に混乱、恐怖し逃げ腰になるものが後を立たず。

そして接敵、雄叫びとともにありえない速度で振り下ろされたラージクラブは哀れな先頭にいた敵の足元を叩く。だがそれで十分、農民崩れの敵にとつて死を想像させるうるものとなる。

恐怖で綻んだ敵隊列を楽々こじ開け、中央から食い破るさまは、まさに虎のごとし。先ほどの一撃を放ち、次々と指示を出すのは部隊を任せられた副官であった。

「——見つけた」

チラリと視線に入った軍旗、そこにめがけて腕を振るう。すると兵達が唸り声を挙げ

ながら、一目散に突撃していく。その圧倒的な圧力になすすべなく、敵兵たちは崩れ落ちていく。

「ええい、貴様ら何をやっておるか！押せ、押し返せえ！」

敵将も声を張り上げ、配下に指示を出す。だがそれも目の前の圧倒的な圧力の前には、上手く機能することはない。敵味方入り乱れる中、ついに先程から必至の形相で声を張り上げる将の姿が顕になった。

その瞬間、荒れ狂う戦場のまっただ中で、一人の男が吠えた。

まるで龍の咆哮とも思える迫力を持つて、戦場の時が止まる。誰も彼もが痙攣したかのように手を止め、その咆哮を発した男の方へと視線を向けざる負えなくなった。

「一騎打ちだ、道を開けろ！」

その命令に兵達は敵味方関係なく、さも当然のように止まっていた身体を移動させ、そして一本の道、空間が出来上がる。

互いの将の眼の前に有った、兵という壁は取り払われた。

「い、一体なんだというのだ！」

一方は堂々と目の前にできた道を同然のように進み、もう一方は突然の出来事が理解できず、その場で足踏みをする。正直に言えば、既にその時点で勝敗は決まったも同然であつただろう。だからといってこのままにいることを男も、そして周囲も許さない。

「わざわざ貴様のために用意した舞台だ。さっさと覚悟を決め、男らしく散れ！」

その一言に同調するように、兵達は互いの将の名を叫び合う。立ち止まっていた将は覚悟を決めたようで、顔を青くさせながら、人生最後の花道を駆け抜ける。

その姿を見て満足した俺はこちらに近寄ってくる将を横目で見つつ、心地よく声援を受けていた上官に近寄った。そして膝をつき、こうべを垂れる。

「お待たせしました」

「いやよくやった。さすがだ」

「ありがとうございます。相手、大したことなさそうですが、くれぐれも油断なさらぬように」

「お前は私が負けると思っているのか？」

「想像できませんね。素手でゴリラに挑むようなもんです。勝機なんてあるはずがない」

「よし、意味はわからんがなんとなくあとでお仕置きだ！」

「職権乱用?!」

命の遣り取りをする目前だというのに、緊張した様子もなく互いに笑い合う。まるで戦場のまったただ中とは思えない光景だが、二人にとっては違和感のあるものではない。

「では、武運を」

「ああ、あとは任せておけ」

すれ違いざまに互いに拳を付き合わせる。そしてそのまま邪魔にならぬよう、群衆の中に紛れ込んだ。

大声援を浴びて、関羽様は野太い野郎どもに彩られた道を心地よさそうに歩く。そして中央まで来ると、己の武器を肩に担ぎ、敵将と会話を交わす。喧騒の中、その声は聞こえてこない。だが彼女が今この瞬間最も輝いているのは間違いないだろう。

そして互いに構えを取る。その姿だけでもはやその差は歴然であった。やはり万が一など有り様がない。

互の武器を合わせ、一騎打ちが始まった。そして俺は特等席で、今日も彼女の勇姿を見る。

あーくっそホント綺麗だなあ。なんで戦場にいるのにあんなに髪の毛ツヤツヤなん？あんな綺麗な黒髪が視界にあつたらガン見して戦闘とかに集中できんわ！そして胸、大きすぎ。あんな強調するような服着て反則すぎる、とかどつからどう見ても戦場に身を置く格好じゃありませんから。足振り上げたらスカート捲れちゃうし、ちらちらとシミ一つない絶対領域が目毒だし、青竜刀振り上げた時に見える脇が堪らなくいい。それでいてあの強さ、ヴァルクユリーとかつて関羽様のこと言うんじゃないかな、つまりここは本当は天界だったのだ、ナツ、ナンダッテー。

そう脳内で茶番を繰り広げているうちに敵将を一刀両断にした関羽様が勝鬨を上げる。敵将は本当に哀れなり。

笑みを浮かべながらこちらに戻ってくる関羽様にタオルを差し出す。顔に飛び散った血とその笑みのコンボは相当恐ろしいです。

「すまん、助かった」

「いえいえ、せつかくの美しいお顔が、血で汚れていてはもったいないですから」

「世辞はいい、勝敗はこれで決しただろう。軍師殿からなにか指示は届いているか？」

「はい、追撃はしなくていいと。投降したものは今武装解除をやらせている最中です。関羽様のあの姿を見たのですから、ほとんど抵抗なく進んでいることでしょう。あとはこちらでやっておきますので、少し休憩しててください」

「ああ、何かあればすぐに呼んでくれ」

こちらを振り返ることなく歩む後ろ姿は、そんなよそこの男よりも凛々しく格好良い。チラチラ見える太ももと尻尾のように揺れる髪を見送ったあと、未だに酔いしれている男どもへと号令を発する。

「おめえら帰るぞ！ さっさとしねえと劉備様が待ちくたびれて寝ちまうじゃねえか！ 愛らしい寝顔もいいが、笑顔でおかえりつて声かけてもらったほうが嬉しいだろうが！ ああ？ もちろん寝顔なんか鬼関羽様が意地でも見せてもらえねーだろうけどな」

笑いながらついてくる仲間たち、こういった正規兵にはない軽口が義勇兵である俺たちの活力となる。一人一人にお帰りと喋ってくれる劉備様がいるからこそ、生きて帰ろうと頑張れる。強く、美しく、気高く、最前線で槍を振るう関羽様がいるからこそ、この関羽隊は高い士気を保つことができる。

わずか数百人、大望へ向けて歩き始めた劉備様の一翼こと関羽隊。それが俺たちである。そしてその関羽様を支える副官の一人、それが俺こと周倉である。

ある夜、周倉は関羽から呼び出され、主要人物が集まる天幕へと趣いた。そこには今だに慣れない雰囲気に戸惑い、隣の人物の服の袖をそつとつまんでいる劉備玄德。その右側の一步引いたところで関羽と張飛がそれぞれ笑みを浮かべながら付き従う。左側には緊張した面持ちでこちらを見上げるちびつ子二人、諸葛亮と龐統。そして周倉の真正面に立ち、劉備の隣で気楽そうな雰囲気でこちらの様子を伺う青年、天の御使いこと北郷一刀。

関羽から呼び出されて期待された来た自分が馬鹿のようだ、とそつとため息をついた。正直落胆した部分はあるが顔には出さない、気づかれてしまえばそれは上官である関羽の顔に泥を塗ることとなるからだ。

「悪いね、周倉さん。休んでいるところに来てもらっちゃって。そんな重い話じゃないからとりあえず気楽にしていよいよ」

「いえ、滅相ありません。天の御使い様」

気楽で。仮にも天の御使いを名乗ってる人にそんな無礼なことできるわけない。違うことは分かかっていても、はいそうですかと態度を改めることなどできない。それがこの世界に生きているもの的一般常識であり、異端者は奇異の目で見られるだけならまだしも、迫害され最悪極刑になってしまってもおかしくないのだから。それくらいやばいことをやっているのを自覚して欲しい。

「あ、あの。今日は周倉さんにお願いがあつて呼び出したんでしゅ」

諸葛亮が嘯み嘯みながら一歩前に出る。最初にあつたときは驚いたものだ。こんなまだ子供にしか見えない少女が諸葛亮だなんて。とはいっても大抵の有力者は女性なのだから完全に予想外ではなかったが。

「今回の戦いで幾人かの捕虜が出ました。その中でともに戦つてくれる方を選別し、率いて欲しいのです」

捕虜を説得し、戦力不足の我が軍に迎え入れたい。確かに現状は関羽、張飛の力でなんとか勝利を挙げているが、それでも戦争は数だ。どれだけ強くても、一人二人の出来ることは限られている。ゆえにその選別肢はわからないでもない。

「賊を、ですか？」

だが正規兵だったものならまだしも、相手は力のないものを襲い、奪ってきた犯罪者だ。そんな奴らと肩を並べ、ともに戦おうとは感情的にできるものではない。いつ寝首をかかれるかわかったものではないのだから、そんな信用できないものを仲間と呼べるはずもなく、背中を、命を預けるに値しない。というかもうこれ罰ゲームだろ。

「信用できないことは分かっています。でも犯罪者だから皆殺しにしなければいけない、罪を償う機会すら与えないなんてことはご主人様も、私たちも望んではいません。ですから志あるものだけを選別し、彼らを指揮して欲しいのです」

要するに最後のチャンスというわけだ。今殺さない代わりに、私たちのために戦えとそう言いたいのだろうかこの軍師様は。気づいているのかいないのか、まあ十中八九気づいて言っているのだろう。さすが諸葛亮、といったところだろうか。その他の龐統を除いた面々は、額面通りに受け取っているのだろうか、物は言いようということだ。

さて次に何故俺にその白羽の矢が立ったかということであるが、関羽の副官という実績と、名前に問題があつたのだろう。安易に周倉なんて偽名を使ったことが完全に裏目に出てしまった結果であつた。関羽の副官だつたらそりや周倉だろうという縁起担ぎをしてしまったために起きた完全に自業自得である。

「大変申し訳ないのですが、自分はそんな器ではありません。今でも関羽様の後を付いていくので精一杯です」

半分嘘の半分本当だ。実際自分が大将としてやってく自信なんてない。そんな責任重大な役割をさせられるよりも補助とかサポートとか裏役の方が性にあつてる。ただ付いていくので精一杯というのは嘘っぱちだが。なによりそんな罰ゲーム受ける気は毛頭ない。断固拒否する！

とまあ言い訳したのだが、彼らにはそれは予想外であつたらしい。ぽかんとこちらの顔を見つめられる。特に北郷君、その顔は面白すぎるんだけど。

「あ、あゝ」

「はっ、期待に添えられず申し訳ありません！」

「はわわ・・・」

聞く耳持ちませんアピールに軍師&劉備様たちは言葉が続かないらしい。いやむしろ怖がられている？そんなに怒ってるつもりもないし、戦場の関羽様よりかははるかに温和な顔をしていると思うんだが。

「周倉、もう少し考えてくれないか」

見かねたのか関羽様が助け船を出す。人の言いづらいところ、負と言われる部分を率先して引き受けてくれるすごく稀有で貧乏くじな人。わかっていたけどこの人に言われるとまるでいらないうて言われているようで、被害妄想なんだろうけど。

「でしたら御使い様が指揮してはどうでしょうか。御使い様の御威光があれば彼らも心を入れ替え共に戦ってくださいるでしょう」

「あわわ、そ、それは」

「ご主人様は我々にとつて唯一無二の御旗、よほどのことがない限り戦場に立つような真似はさせられない」

「そーなのだ。鈴々立ちに任せて、お兄ちゃんとお姉ちゃんはゆつくりしてるといいのだ！」

つい口から出てしまった意地悪だが、思いのほか効果があったらしい。慌てた様子を

見せる彼女たちの様子から、そのまま押しきれるかと思いきや武官二人にガードされる。特に一瞬たじろいだと軍師二人は御使いが先頭に立つことの有用性を考えたということだ、思つた以上に嫌な方向でできるらしい。

結局会議はぐちゃぐちゃになりいつの間にか流れで解散となつていた。今だけこの緩さが助かるが、大丈夫かと心配になつた。

その後捕虜は予定通り希望者のみ連れて行き、残りは開放という形になつた。だが予想以上に残つた数が多く、上層部は劉備と北郷の仁君つぶりにより一層忠誠を誓つたとか、食糧問題がより一層深刻化して頭を悩ませたとか。

捕虜だつた者たちは新たに部隊を新設するのではなく、各部隊に増員するという形をとつたため部隊内の不和が積もり始めていた。つい先日まで敵だつたものと肩を並べてともに戦うというのは、想像しているよりもはるかに難しい。今でも時々、関羽様や軍師たちにそいつらをまとめて部隊にしてくれと頼まれる。

「自分は関羽様の副官ですから」

突っぱねるけれども結構しつこい。実際部隊の様子を目にしてるし気持ちもわかるが、無理やり押し付けられる方の身にもなつて欲しい。命賭けてるんだぜ、無給で。

「絶対に一人で当たるな！数ではこちらが有利なんだ、仲間と共に冷静に対処しろ！」

戦場の怒号の中、それに負けないように大声で指示を出す。近くで敵の残党を発見した劉備軍は部隊を展開し、迎撃にあたっている。どうやら数も関羽隊よりも少ないようで、いつもの比べて楽に対応できそうだ。敵將の姿も見られず、指示を出している人間の顔色も動揺している。あえて無理して優先的に狙う必要性も感じない。最前線まで出て青竜刀を振るう関羽様の力を持つてすればさほど時間はかからないだろう。

戦いに集中している関羽様をサポートする俺、新参兵たちが少しばかり動揺しているため宥めるのに手間がかかりそうだが概ね問題なさそうだ。まるで舞のように敵を切り裂く関羽様に見蕩れている合間に片手間で指示を出していると、慌てた様子の兵が一人、こちらに駆け寄ってきた。

「周倉さん！伝令です。関羽様はどちらに?!」

「最前線で今武器を振るっておられる。要件なら俺が聞こう」

額に大量の汗を垂らしているほど疲労している伝令に、最前線の関羽様のところまで行かせるのは危険すぎる。

「はっ、諸葛亮様より伝令です。敵別働隊がこちらに接近中、至急応援求む、です」
「なに?!」

目の前の敵は囷ということか、通りで数も少なく手応えが少ないわけだ。
「伝令ご苦労。後方に下がり休んでいてくれ」

敬礼する伝令兵を置いてすぐさま関羽様のところへ向かう。敵は完全に逃げ腰のようだ。襲いかかるような真似をせず、緊張した面持ちで距離をとっている。武器を振るうても止まっており、ちょうど良いタイミングだったようだ。

「関羽様」

「なんだ、周倉」

「諸葛亮様から伝令です。敵別働隊がこちらに接近中、至急応援求む、だそうです。すぐさま反転、この場からさっさと移動致しましょう」

伝令を伝えると、関羽様は考えるような素振りを見せた。敵は既に逃げ腰、ここまで崩れていてはこちらが撤退しても追撃されることはないだろう。時間は刻々と推移している、すぐさま行動に移すべきだと思うのだが。だが、関羽様は俺の予想を裏切り、驚くようなことを口にした。

「・・・隊を二つに分ける。お前はここに残り戦闘を継続してくれ。私は桃香様のもとへ戻る」

「……隊を二つに分ける必要はないのでは？既に目の前の敵には戦意がありません。追撃の恐れもほぼないはずですよ。ここで戦力を分散させるのは愚策かと」

「今は一刻の猶予もないのだ。連携がとれ、速度が出せる元関羽隊の奴らを連れて行く。これは命令だ、周倉、お前は残った奴らをまとめて指揮を取れ！」

「そんな?!」

「そんなもこんなもない！今は緊急事態なのだ！」

思わず歯噛みしている俺では埒が明かかないと思つたのか、近くにいた兵士を呼び止め小隊長への伝令に走らせた。そして俺が何か言う前に優しげな笑みを浮かべた関羽様は、ぼんと俺の肩を叩いた。

「お前ならできる、あとは頼んだぞ。関羽隊、一番隊、二番隊、三番隊は私に続け！桃香様の救援に向かう！」

サイドポニーの麗しい黒髪を尻尾のようになびかせながら関羽様はこの場を離れ、その姿は彼女の後に続いたほかの隊員によつて見えなくなつた。あつという間の出来事、残されたのは俺と新参兵、つまりこの間まで賊をしていた奴らだ。

先程まで戦つていた賊たちは、こちらの一部が撤退による戦力低下を知り少しだけ士気が回復したようだった。完全に中途半端な戦力の分担が仇となつていた。

「密集して各個撃破を防ぐぞ。五番隊は怪我をしているものを助けつつ後方に下がれ。

四番隊はその援護だ」

いきなり主力が抜けたことに戸惑い、挙句パニツクになるモノすら現れる。最高戦力であつた関羽が抜けたという事実は、新参兵にとつて精神的支柱を抜かれたようなものである。そうと知つていてなお彼らを連れずに救援に向かつたのだろうか、それとも気が動転していただけなのか。

ぶつちやけ俺もパニツク寸前だ。早く立て直さなければ、場合によつては壊滅するなんてこともあり得るかもしれない。ものすごく逃げ出したい気持ちに駆られるが、敬愛する関羽様に頼まれたからにはどうにかしなければいけない、そんな義務感ゆえの行動だつた。

必死に声を張り上げ部隊を掌握しようとする。だがその声も届かない。彼らは元々が賊であり、義勇兵のように強い志を持つてゐるわけでもない。

逃げ出そうとする者。

棒立ちになつて唾然とする者。

必死に目の前の賊に立ち向かおうとする者。

恐ろしい形相で俺を怒鳴りつける者。

バラバラ、バラバラ。

周囲からの雑音によつて頭の中がぐちゃぐちゃになる。後悔に塗れた頭は現実から

逃避をし始め、今のこの状況誰が悪いのかそんなどうでもいいことを考え始めた。

俺らを置いて行つてしまった関羽様か、敵に裏をかかれた諸葛亮様か、目の前でこちらに武器を向ける賊か、こちらに耳を傾けずパニックに陥っている味方か、関羽様が綺麗だったからなんて気分でこの軍に加わつた俺か。

追い詰められた精神、混乱した頭は限界に達する。溢れた感情が制御できなくなつていた。

周倉は詰め寄つていた味方を無視し、敵に向けて歩き出した。不審に思つてか彼の顔を覗き込んだ味方の一人が、恐怖に顔を歪め尻餅をついた。

周倉は周りが見えていないのではないかと思わせるほど自然に、まるで散歩するように賊に近づいていった。その光景はあまりの異様さに、一瞬敵味方問わず、周りが冷静になるほどであつた。

「はっ、馬鹿が！」

そしてついに接敵、一番近かつた賊が剣を振るう。まるで隙だらけ、賊の男は鼻で笑い、この男の頭をかち割ろうとした。

「キモイ」

だがその攻撃はあつさりとかわされた。上半身を僅かに逸らした最小限の動きに

よつて。そして周倉から眩きとともに放たれた攻撃、まるでハエを追い払うように振られた手にはこの世界にはない刃物、ファイティングナイフといわれるものが握られていた。

武器として作られたそれは賊の頸動脈をあつさり搔つ切つた。吹き出る血液、賊の男は信じられないといった表情を浮かべ、音を立てて地面に倒れた。

静まり返る戦場に呼応するように徐々に広がっていく血だまり、戦場では決して珍しくない光景であるはずなのにこの場にいる人間、一人を除いて何かの間違つているとしか思えなかった。

「キモイ、気持ち悪い、キモい、きもい、気持ち悪……」

その光景を作り出した張本人は、その過程で答えを見つけた。

「ああ、そうか、そうだよな、それしかないよな」

妙にそのすつきりとした笑顔に、怖気が走る。

「ストレスの元を断てばいいんだよな」

次の瞬間、また新たに血の雨が降り一人の賊が地に伏した。敵味方入り乱れるこの空間は、その瞬間地獄が変わつた。

目の前で起きたことが理解できない、それは思考に隙を生む。ケタケタ笑いながら向かってくる男の手によつて、呼吸するように気軽に仲間が死んでゆく。そんな光景を理

解などできるはずもなく、ただただ呆然と見ていることしかできない。

狂った周倉は的確に頸動脈を掻っ切り地の雨を降らせる。周倉の持つファイティングナイフはこの世界で最強の武器の一つと言っても過言ではない。切れ味、耐久性、使いやすい、どれをとっても比べ物になるはずもない。

「ストレスは早めに発散しておかないと、貯めると鬱とか怖いんだからさ。自分ゆとり世代なんで辛いことがあるとマジ逃げ出したんだよね。こんなパワハラマジありえねえっていうか、部下放り出すとかないわー」

ブツブツとつぶやく言葉は、誰の耳にも届くことはなく。

「だからさ、お前ら消えろよ」

これから死ぬ彼らには、導き出された答えが短絡的に決められたとは知る由もなかった。

「本当にこれでよかったのでしょうか」

救援指示を受け、張飛隊と共に挟撃によつて別働隊を撃破した関羽は目の前の少女と青年に投げかけた。二人は笑顔でうなづいた。

「なんとうるか上手くは言えないんだけど、周倉だったらあれくらい簡単にこなすよ」

「ご主人様。それも天の知識、でしょうか」

「うん、まあそんなものかな」

「はわわつ、実際この目で見ても周倉さんは実力がある方です。それに先日のやり取りから見ても冷静で頭もキレます。愛紗さんには申し訳ないんですが増えていく兵に對して將の数が足りない現状、彼が一軍を受け持つてくれると戦術の幅が広がるんです」

「そうだよ、ちよつと荒療治かもしれないけど今回のことできつと自信がつくさ。そして俺たちはもつと強くなって、もつとたくさんの人が助けられるようになる」

その言葉に、関羽は少しだけ、少しだけ罪悪感を残し頷いた。

今回の部隊を分割しての救援、それは仕組まれたことだった。斥候からの情報から囿を使用しての本隊強襲という敵の作戦を予測していた諸葛亮は、囿に引つかかったふりをしての関羽、張飛隊による挟撃という構想を練っていた。

そこに今回の件を組み込んだのである。敵は囿であり少数、例え関羽が抜けても普段の関羽隊の統率を見れば問題ない。また先んじて関羽が敵の戦意をそいでいれば新参兵たちが残されたとしても彼なら対処出来るだけの能力がある。

実際諸葛亮の見方は間違つてはいない。あの時のこちらの思惑を見透かしたような白々しい謙遜、普段の人心掌握能力と的確な指示、敵にも味方にも厳しい関羽の補佐を十分にやれるだけの能力があるのだ。一部隊といつても所詮は義勇兵、数も大して違わない。

だが諸葛亮は見余つていた。周倉のその精神的な弱さを。

関羽という支柱があるからこそ發揮できていた能力は、取り払われたとき使い物にならなくなったのだ。過度のストレス、精神的に追い詰められた周倉は暴走する。幸か不幸か、この時それは露見することはなかった。

「あわわつ、よかつた周倉さん無事みたい」

本隊の指示を出していた諸葛亮とは別に、信頼できる護衛を付け龐統は周倉の様子を確認しに来ていた。戦闘は既に終わつていたようで、周倉を先頭に静かに本隊に向けて帰還しているようであつた。

「？」

ふと、龐統はその光景に違和感を感じたが、しかしそれはなにかわからない。龐統は初めて関羽なしでの部隊指揮で疲れたんだと無理やり結論づけ、とりあえず周倉に合流するために足を速めた。

「あ、龐統様じゃないですか。本隊の方は？」

「あ、はい。愛紗さんたちが来てくれたおかげで、上手く挟撃することができました。周倉さんたちもご無事でよかったです」

「いえいえ、こちらの敵は関羽様がほとんどやつつけたようなものです。ほんとには私たちもすぐに駆けつけたかったです、不慣れなせいで時間がかかってしまい申し訳ありません」

「あわわ、初めてですし仕方ありません」

「そう言ってもらえると助かります」

普段と変わらずこちらのことも気を使ってくれる周倉に、今回の件のことを知っている龐統は罪悪感が紛れた。そして予想通り無事この試練を乗り越えてくれたことが嬉しくもある。

「戻りましょう、愛紗さんたちが待っていますよ」

そう言つて前を向いて歩き出した龐統は、一瞬暗い笑みを浮かべた周倉に気づくことはなかった。

「周倉、すまなかつた」

「いえ、緊急事態でしたし仕方ありません」

本隊と合流し、兵たちに指示を出したあと、見計らったのように関羽が声をかけてきた。

「そう言ってもらえると助かる。で、私がいなかったが大丈夫だったか?」

「確かに大変でしたがなんとか。自分には関羽様のように人を従わせる魅力とクソ度胸がないので」

「おい」

「おおっと、失礼」

いつものように砕けた会話と変わらない周倉の様子に、関羽はホッと胸をなでおろした。だからだろうか、安心した関羽はつい口を滑らせてしまう。

「どうだ、自信は付いたか? 私も初めて自分の責任で兵たちを戦わせたときはひどく緊張してしまつてな。不安げな顔している奴がいてつい怒鳴つてしまうことも多々あった。周倉、お前のことだから私と違って実は簡単にこなせたんじゃないか?」

「・・・まさか、滅相もない」

「謙遜しすぎるのはお前の悪い癖だな。もう少し強欲というか、うん、直しておかないといろいろ損することになるぞ」

「関羽様には言われたくないですね、それ」

互いに笑い合う、どちらも難儀な性格をしている。

「ではすみません、今日は疲れたのでお先に休ませてもらいます」

「ああ、ご苦労だった。ゆっくり休め」

周倉は背を向け歩き出した。関羽もそれに習いこの場を後にしようとしたその時、周倉が振り返る。

「あ、すみません。ひとつ聞いていいですか？」

「ん、なんだ？」

聞きたいこととは今後の事だろうか。既に朱里が新編成の下準備をしているし、おそらく周倉に一部隊任せることとなるだろう。そうすれば後は後ろではなく肩を並べて戦う仲間、地位的な意味での話であるが頼もしいことこの上ない。だが放たれた言葉は想像とは異なり、突き刺さった。

「もしかして、知ってました？」

固まった関羽の目には一瞬だけ、周倉が別人に見えた。関羽が思わず後ずさつてしまうほどの驚異の対象として。だがそれも錯覚なのではないかと思うほど、今は先程までの心地よい空気に戻っている。

「関羽様と離れたくなくて駄々をこねてたなんて、今考えると子供っぽくて、お恥ずかし

い限りです。どうか秘密にしておいてくださいよ」

そう言つて笑つたあち、今度こそ周倉はこの場所を去つていた。関羽がいつの間にか握つていた拳は、じんわりと汗をかいていた。

その後一部隊を任された周倉は軍師の指示で様々な無茶を押し付けられる。諸葛亮にとつて清廉潔白で高潔である関羽や張飛にはこなすことができない裏方仕事を頼むことができる周倉は実に都合が良かった。

そしてひとつ、またひとつ仕事をこなししていく周倉は徐々に墮ちていくこととなる……

葛藤

上司に恵まれない、そんな人はいくらでもいる。むしろ自分はマシな方だと他者と比較することで己を慰めるのは本当に正しいことなのか。時には受け入れるだけではないか、違うと突っぱねることも必要なのではないか。

「すみません周倉さん。本当に、ごめんなさい」

魔女帽子で顔を隠し俯く彼女、鳳統さんを見ると嫌とは言えなかった。

つい先ほど諸葛亮からくだされた命令は「死体あさり」。資源に乏しい劉備軍は常に補給との戦いだ。しかし後援者がいるわけでもなく、強奪、徴収などをおこなうことはない。劉備軍は基本的には権力者からの好意で成り立っているといってもいい、表向きは。だがそんな人間がホイホイ現れるか？ 答えはもちろん否、そのような人間がいるならばこんな時代にはなっていないかっただろう。

ではそのギリギリの劉備軍はどのように生き繋いでいるか、答えは「鹵獲」。打ち破った黄巾党らが置いていった物資を使用しているのだ。勿論そのままそっくり使ってしまったのは当然世間体が悪い。なぜならそれらは元々黄巾党が村や街から奪い取ったものであるため、これではその物資が欲しいがために黄巾党と戦ったと思われかねな

い。故に劉備様達は手に入れた物資を近くの村へと還元するようにしている。

だが勿論そんなことをしてはすぐに干上がってしまう。故に軍師達はこつそりと裏から手を回す。鹵獲した物資からピンハネしたり、時には還元した物資がこつちに還つてくるように言葉巧みに誘導する。

そして今回の死体あきりは正しくその一環。劉備様たちが村で歓待を受けているうちにこそそと物資を手に入れてこい、という諸葛亮からの無慈悲な命令であった。

理解はできる、だが納得はできない。

必要なことだと思う、誰かがやらなければならぬ。しかしそれを周倉率いる部隊が毎回必ず行うことにはどう考えても納得できない。

劉備が知れば泣くだろう。

関羽が知れば怒鳴り散らし、叩き切られるかもしれない。

張飛はその意味を理解しないかもしれないが、難色を示すだろう。

北郷は糾弾するだろう、現実を知らないまま。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

目の前の鳳統はそれを理解し、なおこちらに向けて頭を下げる。花形と言え関羽、張飛にこの作業をさせることができない。では残った選択肢は一つのみ。

まだこうして頭を下げ謝罪の言葉を口にする上司がいることに、少しだけ救われた気

がする周倉であつた。

もう何度も行われているとあつて、死体の懐をまさぐるといふのは手馴れた作業だ。部下たちも手馴れた様子でその作業を行つてゐる。この周倉隊は元黄巾党で占められている。部隊は異なり面識はなくとも、元仲間の死体あさりを行わせるのはあまりにひどい行為……かと思われたが。

「こいつらはただの賊だな。天和ちゃんの可愛さを知らずに死ぬとはなんと哀れなことよ」

「全くだ、地和ちゃんの元気を感じれば安らかに逝けただろうに」

「人和ちゃん、元気かなあ……」

意外とそんなことはなかつたのである。

一時期はまるで恐怖政治のような感じになつていたものの、持ち前の馴れ馴れしさですぐさま打ち解け、劉備たちも知らないような情報——黄巾党の内部情報を周倉は知っていたりする。本来すぐさま上に知らせるべき事柄であるが、上への反発が根付い

ていた周倉にとってこつそり教えてくれた秘密を暴露するような真似は断じてできなかった。それでは部下のことを顧みないあいつらと同じだ。

「くつそう、俺も会つてみたかったなあ」

「隊長ならぜつてー天和ちゃんが好きになると思うぜ」

「いやいや、あの地和ちゃんの控えめな胸こそ至高」

「メガネっ娘は世界遺産です。というわけで人和ちゃんを」

すぐさま己の派閥を増やそうとするところ以外、実に氣にいい奴らである。時には対立するときもあるが、基本的に仲間意識が高く、こちらの苦勞にも理解を示してくれる。文句も言うが、誠実に任務をこなす、とても頼りになる仲間たちだ。

「うおおお！てめーらをぜつてー張三姉妹に合わせてやるぜ！これは、男の誓いだ！だからそれまで死ぬんじゃねえぞ！」

歓声が上がる。とても死体あさりなんてしているような場面とは思えない光景であった。

そしてあらかた物資を補給できた頃、この周倉隊にとってお楽しみみの時間が訪れる。何も死体あさりを行うのは人間だけとは限らず、血の匂いを嗅ぎつけた肉食動物などが群がってくることもあるのだ。時には虎なんてやばいものも釣れる時があるが今回は

まさに絶好の獲物が到来したのである。

「猪・・・だと?！」

本来あまり肉を食べない猪がなぜか迷い込んできたのである。その丸々と肥ったからだは飢えて飛びついたというわけではなく、興味本位で姿を現したのかもしれない。それほど貫禄があつたのだ。

「つしゃ!お前ら下がってろよ」

声を潜め後ろの部下たちに合図を飛ばす。ラージクラブ片手にゆっくりと背後から忍び寄る。だがその直前こちらの気配に気づいたのか、猪はこちらを振り返った。

「いいね、美味しそうだ」

まだ、殺気は出さない。逃げられては元も子もない。油断を誘い、まっすぐとこちらに向かつてくるようにしたい。

ジリジリと後退をする。後退とは力のない弱者がするもの、だが野生動物には本当に弱者かどうかなどわからず、ただ逃げ出そうとしていることのみに応答する。

単調な動きで突撃してくる猪に向けて振りかぶられたラージクラブによるカウンターの一撃。だがその一撃は軽い脳震盪を起こさせる程度で100kgに近い巨体の勢いをわずかにぐらつかせるくらいでしかなく。

そのまま鋭い牙が周倉に突き刺さるかと思えたその一瞬。

猪は空を飛んだ。

技術屋の周倉にしてみれば体勢が崩れればその運動エネルギーのベクトル操作は造作もないことであつた。このラージクラブ、見た目は凶悪な鈍器に見えて実は中身スカスカのハツタリ用なのである。本来のラージクラブを関羽が使えば、恐らく猪はペしやんこになつていただろう。

猪は勢いそのまま頭から木に激突し、完全に意識を失つた。

「フウー！ さすが隊長！」

すぐさま絶命させるために猪に群がる部下たちは、あつという間に血抜きまで済ませてしまう。その手際の良さに苦笑いを浮かべてしまう。

「いや、いいものが手に入った。俺たちも宴会と行こうや」

「そうですね。久々に食べごたえがありそうだあ」

荷物を手早くまとめ、この場を離脱する。猪だからいいが熊や虎が来てしまつては骨が折れる。特に虎は見返りがすくなさすぎてやっていられない。

ヒヤッハーと世紀末風に叫ぶバカを抑えつつ、軽い足取りで陣へと戻つた。

戻ってきた俺たちに待っていたのは屈辱。

大したもてなしもなかったためか、早々に帰ってきてきた劉備たちと鉢合わせしてしまう。猪を持っていた俺たちは、任務を放り出し狩りに行っていたと思われたようで、関羽が激しい叱責を行う。勿論責任者である周倉が呼び出され、部下たちは解放された。

「貴様、任務をなんだと思っている！」

「申し訳、ありません」

「狩りに行っていた？貴様の任務放棄で我々がどうなるか考えてはおらなかったのか?!」

「申し訳ありません」

「なんだ?!謝って済む問題ではないだろう」

胸ぐらを掴まれ、そのまま突き飛ばされた。その瞳には怒りがいつにも増してはつきりと見て取れる。もしかしたら村で何かあったのかもしれない。

「あ、愛紗ちゃん。もういいから。周倉さんも反省してると思うし・・・」

「しかし桃香様っ、こいつはもと私の副官です。私は貴様を見誤っていた、くそっ、その程度ということか！」

「あ、愛紗」

「ご主人様も黙っててください！これは、私と周倉の問題です」

関羽をなだめる劉備と北郷を横目に諸葛亮を見ると、こちらをはつきりと睨みつけていた。口を開閉させる、たぶん、余計なことを喋るな、だろうか。世の横の鳳統はうつむき、スカートをきつく握り締めていた。

「いいだろう。桃香様とご主人様に免じて、今回だけは許してやる。次同じようなことを行えば、私が叩き切つてやる。懲罰は追つて知らせる」

「ありがとうございます、本当に申し訳ありませんでした」

「フンッ」

関羽はこちらを一瞥すると、天幕から出ていった。周倉は劉備と北郷頭を下げ、その場を後にする。背後で諸葛亮の話し声がある、恐らく真実を語った——なんてことはありえない。再度利用するためにできる限り罰を軽いものにしようと働きかけているのだろう。恐らく北郷もそれに加わる、周倉がこんなところで消える歴史はありえない、そう思っているはず。

「くそっ」

あの場で反抗的な態度を見せていれば、関羽に叩き切られていただろう。懲罰が自分ひとりで済んだ、それだけマシかもしれない。もしこれで部下たちにまで何かあつたら

本当に申し訳が立たないところであった。

今夜はストレス発散しよう、運良く猪と言おう大物も手に入った。周倉隊で分け合つても十分お釣りがくる。久々に食事で満足感を得られるだろう。

久々——何故か周倉隊の食料配分はほかに比べ少ない。それ以外にも扱いは悪いし雑務なども多い。それは黄巾党で構成された隊であるから仕方ないとも言えないが、なんとも複雑な気持ちにならざる負えない。

人々が笑つて暮らせる世界に。

俺たち周倉隊がどのような扱いを受けているか知っていますか、劉備様。

だが周倉たちの不幸は止まらない。肉に思いを馳せて戻ってきた周倉が見たものは項垂れる部下たちの姿。

「どうした？何かあったのか?!」

「隊長、すみません」

部下の中にはすすり泣いているものさえいた。果たして、なにが彼らをそうまでしたのだろうか。

周倉の耳に届いた騒ぎ声、そして目の前に本来あるはずのものが無い現状。ようやく、気づいた。

「すみません、猪、持ってかれちゃいました。なんとか手に入れたのはこれだけで」

そういつて差し出したのはわずかばかりの肉。あの場にいなかった張飛が目ざとく猪を見つけ、有無を言わず持ち出してしまった。ご馳走が食べれると期待していた張飛が落胆し、陣に戻るとあったのは肉の塊。劉備軍では隊ごとに食料が割り振られ、そこからやりくりする形をとっている。稀に今回のような獲物を見つけた際にはいざこざが発生しないようにその鯛で処理を行うようにしている、はずであった。

「横暴、すぎるっ……」

すぐさま張飛の元へと向かう、がすでに猪は様々な種類の料理に変わり、分け合っていた。美味そうに大きな塊にかぶりつく張飛、それは周倉隊に分けられたものほとんどと変わらない大きさ。

「関羽様、これはどういうことですか？」

「ああ、周倉か。よく顔を出せたな」

近くで張飛を見ながら肉にばくついていた関羽に声をかける。よく顔を出せた、か。「隊で手に入れた獲物は、隊のものではなかったのですか？」

「ふむ、そうだったか？ 鈴々が自慢げに持ってきたからつきり鈴々が狩ってきたものか。だが度量が狭いな、あれだけの大物、皆で分け合ってこそだろう。あの張飛のようにな」

あまりの物言いに絶句した。この軍にはもとより軍規などなかったのだ。ある

のは多少の価値観とその時の気分だけ。故に周倉はただ従うことしかできないのだ。

「貴様も自分の天幕に戻れ。せっかくの食事がますぐなる」

そういつて関羽はあとからやってきた劉備たちに合流する。背を向け、この場から立ち去る姿を見ていたのは、鳳統だけであつた。

「すまん、皆、すまん」

周倉は初めて土下座をした。それくらい申し訳が立たなかつた。自分に力があれば、そう思わずにはいられなかつた。

「隊長、いえ、俺らこそすんません」

「・・・なにか、だ」

「俺らみたいな黄巾党あがりの隊長何かになつたから、隊長までこんな扱いされてるんです」

「それは違う！」

「違います」

力強く、言い返された。俺もそれ以上言い返せなかった。たしかに心の奥底で思ったこともある、こいつらがいいなければ俺もこんな目にあつていなかったんじゃないかと。だが逃げたらこいつらがどうなる？ 次の奴が誰になるかわからないが、俺よりマシな奴になる可能性はあるのか？

「隊長はいいひとです。初めはおつかかなかつたですが、初めて俺たちが信頼してもいいと思えました。……人和ちゃんの次くらいに」

「だな、天和ちゃんの次くらいに」

「おうとも、地和ちゃんには負けるがなっ」

そう言うて俺の馬鹿な部下たちは笑った。涙が出そうであつた。

「ありがとう、これからも苦勞をかけると思うが、よろしくなっ」

突き出された拳、一人一人ぶつかり合わせる。こんなところに行くより、マジで黄巾党いったほうがいいのではないか、そう思つてしまう。だが黄巾党はいずれ滅びる泥船、こいつらをそこに載せることが果たして本当に幸せなのだろうか。

「あの、周倉さん……」

か細い声の闖入者、鳳統によつて急速に熱が冷める。今の会話、どこまで聞かれていたのだから。正しく失態、張三姉妹の秘密がバレたかもしれないと、皆息を飲む。誰も言

葉を発せない衣装な雰囲気の中、やはり切り出したのは周倉。

「いつから、ここにへ？」

自分でも驚く程冷えた声、その発せられた声の対象はびくんと体を震わせる。いくら人にあらざると思える程の智謀を持つていたとしても見た目は子供、本人曰く子供じゃないと言いつ張るがそんな詐称はいくらでもある。自分がその一例だ。

「あ、の、その、ひとこと、謝りたくて」

「なんのことだい？俺たちは規律を乱し、無断で狩りに向かい、その狩りで手に入れた大猪は取られ、皆で心を入れ替えようと反省会を開いていたところになんのようなかな？謝ることなんて何一つないだろう？」

「あう、う」

自分でもやりすぎだと思う。もしかしたらただの八つ当たりになるかもしれない、だが辛抱できなかった。あの策を出したのが諸葛亮か、それとも鳳統か。いや、どちらでもかまわない、どちらも弁護せず、口を挟まなかったのだから。

張三姉妹の話聞いた鳳統を害するのは簡単、そのまま闇に消えさせてもいい。どうせ近いうちに彼女は死ぬという歴史の定めにいるのだから。いや、すでに狂っているこの世界、もしかして死なないのかもしれない。

「ところで最初の質問なんですが、いつからここに？」

「あわわ、その、周倉さんが、頭を下げているあたりから、です」

迫力に負けたのか、素直に話し始めた。やはり聞いていた。決定的なキーワードは出ていなくても、彼女なら簡単にたどり着くだろう。

「そうか、ならこのあとどうなるか、わかるよね？」

「い、言いません。誰にも、言いませんからっ・・・」

鳳統はへたりこんだ。必死に首を振り、何度も言いませんという彼女の姿を見て笑いがこみ上げてきた。今更、何を言っているのだろうか。

「そんな言葉、誰が信用できると思う？この戦いを終わらせることができるかも知れない鍵を、軍師であるあなたが捨て置く？ありえない」

そもそも彼女たちはこの戦いを集結させるために参戦した。いや、当初はそうだったかも知れないが今は飛躍するための踏み台程度にしか考えていないだろう。劉備と北郷はもしかしたら張三姉妹を見逃すかも知れない、関羽もそのふたりが言えば渋々従うだろう。張飛も恐らく。だが諸葛亮と鳳統はわからない。飛躍のための仕方ない犠牲、彼女たちはそう割り切れる。

「はつきり言おう。俺たちを使い捨ての駒と考えているお前たちが、戻り次第反逆者として処理しない保証がどこにある？」

「そ、そんなっ!？」

「理由なら腐るほどある。関羽、張飛隊をけしかければすぐに終わる。なにせ、装備も、食料も、休息すらまともにも与えられてないのだからな」

新参が後回しにされるなんて当たり前、挙句元は黄巾党なのだ、戦いにならないだろう。寧ろ関羽だけでも殲滅されるかもしれない。どうせこんな事態を計算しての配分だったのだろう。

「わ、わかりました」

「ほう、なにがわかつたんですか？」

百聞は一見に如かず、頭で理解した程度で何ができるといふのか。だが次の言葉に周囲は絶句した。

「わ、私の真名、雖里にかけて誓います。ここであつたこと、全て他言はしません」

真名はそれほどまでに重いもの。その真名によつての誓いは何にも勝るものとなる。

「周倉さんたちが裏方を引き受けてくれていてくれたからこそ、今の私たちがあります。私が報いることができるのは、この程度しか、ありません・・・」

「た、隊長・・・」

「お、あ、すまん」

完全に呆けていた。背中をつつかれ、ようやく意識を取り戻す。鳳統は、それほどの覚悟をもっているということだ。

「……皆、すまん」

必死の形相で返事を待つ鳳統に背を向け、後ろに居た部下たちに向けて頭を下げた。「すまん、皆。お前たちが一番大切なのは張三姉妹のことだってわかって、今お前たちが必死に守ってきた秘密がばれるかもしれないっていう瀬戸際なのに、俺は鳳統を信じてもいいかも知れない、そう思ってる」

今思えば諸葛亮とは違い、鳳統は必ず作戦終了後に声をかけに来た。煩わしくて、追っ払ったときでも、次回には必ず申し訳なきような顔で頭を下げて来た。

「これはお前たちに対して裏切りかも知れない。異論のあるやつは、前に出て、くれ」
彼らは泣いていた。だが誰ひとりとして前に出ては来なかった。

「すまん、皆。俺は最低だ」

たっぷり30秒、彼らに向けて頭を下げ今度は鳳統の方に向き直る。

「真名の誓い、受け取った。俺の真名は、誠、雛里、お前を信じる」

「あ、ありがとうごじやいま、す」

「泣くな。雛里、今後とも宜しく頼む」

「はい、よろしく願います」

目に涙を浮かべつつも、笑顔を振りまいた雛里が、誠は綺麗だと思った。

平穩と不平等

僅か一合。

当たり所が悪ければ一発で人を殺せる程度の硬度を持つているはずの武器が粉々に砕け散る。時には拾い、時には奪い、手当たり次第この戦場にあるありとあらゆる武器を振るものの何度やっても全て結果は同じ。

「シッ!!」

目の前を通り過ぎる剣の刀身は美しく、あれだけ打ち合ったにも関わらず刃こぼれの一つもない。武器としての性能が違いすぎる、絶望的な戦力差。

「無駄無駄無駄! そんなへっぽの武器じゃ俺と打ち合うことなんてできねえぞお!」

賊の巨大化した筋肉から繰り出される一撃は、鈍重なれど凄まじい破壊力を秘め、触ればボロくずとなるだろう。そんな絶望的な状況、周倉は確かに笑った。

「てめっ、何がおかしいんだ!」

「いやあ悪い悪い。最近嫌なことばかりで流れが完全に終わったと思ってたんだけどさ。こう、神様っていうのは平等っていうか、きちんと悪い後にはいいこともあるもんだなってつい笑いがこみ上げてきて」

「ああ？何言つてんだよお前」

賊にはまったくもって理解できない。あまりの状況に気が狂ったのか、隠れきれない忍び笑いを続ける目の前の男が、ただただ気持ちが悪い。手癖が悪く、何度も何度も武器を変え立ち向かってきた奇妙な男、それなりに歯ごたえがあつたがさつさと終わりにしよう、そう決め最後の一撃を加えるために大きく振りかぶる。

「じゃあな、無駄な苦勞、お疲れさん」

25合、それだけの回数防ぎ切つた男に向けて、心にもないねぎらいの言葉を送る。きらめく剣は太陽の光を反射し、神々しく存在感を放つ。その光景は今から人を斬り殺すものとは到底思えず、目を奪われるには十分であつた。

だが現実は無情にも、振り下ろされる。

防ぎようのない攻撃は目の前の薄気味悪い男、周倉を真つ二つにする、はずだった。

「当たらなければどうということはない、なんてな」

防げないのならば回避すればよい。単純明快、例えばエクスカリバーの一撃もハリセンのツツコミも当たらなければ同じである。

賊の攻撃をギリギリですり抜け懐に入り込んだ周倉は、その密着した距離にて己の切

り札を大いに振るう。ファイティングナイフは賊の剣同様、防具含めて簡単に腕を切り裂いた。

賊は痛みに顔を歪め距離を開けようとバックステップを行おうとするも、完全に読まれ足を引つ掛けられ盛大にすつ転ぶ。

この賊の不幸は自分よりも技量で勝る人間に出会わなかったこと。防ぐことができな、そんな嵐の中心に無手で飛び込んで攻撃しようとする人間が今までいかなかった。盾を構え突っ込んできた奴は盾ごと切り飛ばせた。槍で距離を取ろうとした奴は槍ごと真つ二つにしてやれた。何も持つていないただの人間など、力と速さでねじ伏せることができた。

それほど自身の手にある武器を過信していたのだ。

——これがあ限り誰も俺を止めることはできない。

なんて偉い自信を打ち砕かれた賊は、笑顔の周倉に頸動脈を搔つ切られあつてなく死んだのだった。

「あー、死ぬかと思つた」

余裕の勝利、そう思われるかもしれないが実際はいっぱいいっぱいであつた。まとも打ち合える武器はなく、戦場に転がつている武器も有限、もちろん周囲には敵も味方も入り乱れ、目の前の賊一人にかかりつきりというわけにも行かない。おまけにラスト

は決死の飛び込みすらしなければならず、わざわざ挑発して、動きを単調にしてようやく避けられたくらいであった。

だがそれほど危険を犯してなお、お釣りがくるものが手に入った。この世界にはオーパーツと呼べるような武器がある。それは関羽が使う青龍偃月刀や張飛の丈八蛇矛といったものがこれに当たり、周倉が持つファイティングナイフもある意味同様だ。恐ろしい切れ味にありえない強度、打ち合ってもほとんど刃こぼれせず、何人斬っても刀身は曇らず、圧倒的な存在感を見せつける。英雄が所持するためにある、まさに奇跡と言っても過言ではない代物。

故に周倉はそれを求めた。周倉として箔をつけるため、今後の戦いを生き残るために。単純な身体能力ではかなわない化け物たち、この世界の武將たちになりすまし渡り歩いていこうと思うならば手段は選んでいられない。一つでも持てる手札、切り札が必要である。

この目の前の剣は、まさにそのひと振り。

思わずここが戦場であることを忘れ、まじまじとみた。なかなかの質量、残念ながら片手で振るうことができないさそうではあるがその重みが逆に安心感をもたらす。

「隊長、ぼさつとしてないで」

「お、ああ。敵將、討ち取った！貴様らの將はもういないぞー！」

せつかく敵將を討ち取ったにも関わらずぼさつとしていた周倉に向けて部下の一人が声をかけた。將を討ち取ったと知ればこちらの士気は上がり、敵は逆に意気消沈するだろう。もつとしつかりと剣を見たいという欲求はあるが、戦闘を早めに終わらせるべく、慌てて声を張り上げ叫んだ。

慌てて逃げ出す者、武器を捨て降伏を申し出るもの、それでもなお最後まで戦い抜こうとするもの。まだ戦いは終わっていない。

「こんな戦い、さつさと終わらずぞ」

「・・・それをゆつくりと眺めたいからじゃないですよね？隊長」

「まさか、そ、そんなわけないじゃないか。戦いの早期終結、皆無駄な命を散らすべきではない。まだまだ俺達の戦いは続くのだからな」

「う、うそくせー」

「うっさい！さつさとお前も動けや！」

へいへい、と早足で駆けていく部下を見送りながら新たに手に入れた剣を握り締める。周倉は、笑いが止まらなかった。

「ご機嫌つすね隊長。何かいいことでもあったんです?」

「わかる? ほれみろよこれ。どう、どうだ?」

「なんとという見事な剣。隊長に似合わない・・・」

「どういう意味だこらあ」

作戦は無事に成功、さほど被害は出ず、完勝と言つて良い。今回の作戦は伏兵、関羽達が取り逃がした敵を待ち伏せ襲うだけの簡単なお仕事であった。

今回は雛里がかなり頑張つてくれたらしくまさに美味しいとこどりができるポジシヨンに据えてくれたのだが、残念なことに逃げてきたのは大将首ではない残党たち。捕虜の話聞けば、大将自体は既に関羽の手で討たれたとか。ついてないことこの上ない話である。

だがそれでも収穫はあった。それが今周倉が手にしている剣である。

いろいろ試したくてウズウズしている最中、突然慌てた様子で一人の兵士が駆け寄ってきた。確か斥候として出したうちの一人、ここは既に合流地点近くだが、その慌てようから本陣の方で何かあったのか。

「どうした? なにかあったのか?」

「隊長、合流地点に・・・」

「合流地点に？」

「劉の旗以外に、曹の旗が」

「曹・・・まさか曹操か！」

「はい、間違いないかと」

劉備と曹操、まさか二人の出会いがこんな形になるとは。しかも劉備以外に北郷という未知数が交じると果たしてどうなるのか想像もつかない。この時点では敵対するということはないはず、どう動くべきか。

「か、帰りたくねえー」

「隊長、何情けないこと言ってるんですか」

「いやだってあの曹操だよ？ 霸王だよ？ あつたことないけど絶対面倒なことになりそうじゃん」

「じゃんっていわれても・・・仕事、してくださいよ」

背後でうんうんと頷く部下たち。同情はしてくれても助けてくれることはないらしい。ああ、本当に素晴らしい仲間を持ったものである。そうこういつているうちに本陣近くまでたどり着いた。

「わかったわ。仕方ないが俺は報告があるから劉備様のもとへ行ってくる。お前たちは

けが人の治療、装備品の手入れ、あと飯食つてゆつくり休んでくれ」

「了解しました。隊長も無理しないでくださいよ」

「わーつてゐるつて。んじゃご苦労さん」

即席で作った剣帯に剣を収め、劉備たちがいる天幕まで向かう。新しく腰に加わった重みがなんともくすぐつたい。新しいおもちゃを買ってもらった子供か、と今の自分の姿を省みて周倉は思わず苦笑いをしてしまった。だがこれから行く先に何が起きるかと考えた瞬間、暗鬱な気持ちになった。

周倉ができることは恐らく行われているであろう会談、既に終わっていることを祈るのみ。

劉備たちがいる天幕へと向かう途中、人が右へ左へ慌ただしく奔走している。戦いの後はだいたいこんなもので、やることなんていくらでもある。ちなみに劉備や関羽、張飛や軍師殿たちが歩いていけば、奔走の中でも皆一礼したりするのだが、残念ながら周倉にはそんな気遣いはされなかった。

いつものことをいつも通りに受け入れていると、なにやら前から見慣れぬ集団が歩いてくる。劉備軍は小規模、見慣れないということとはつまり別勢力の人間、ということではこの場にいる別勢力の人間とは誰か。

その姿はまさに威風堂々、小さくも遠目から見てわかるほどの覇気と威圧感、まさに

英雄足り得る貫禄を持った少女がこちらに向かって歩いてくる。そしてその少女の斜め後ろ、護衛であろう女性は……周倉の目には化物に映った。

「曹、孟徳」

周倉の口から言葉が漏れる。彼女は正しく『霸王』だ。目視しただけでここまで圧倒されたのは初めて関羽を見たとき以来、神経がピリピリと焼け、嫌な汗が流れる。

咄嗟に気配を消し、群衆の中に紛れた。半ばそれはある種の生存本能からくるものだったのか、関わってはいけなさと無意識の行動であった。

ゆっくりと距離が縮まる。心臓が飛び出してしまうのではないかと思うくらい激しい鼓動、ただ歩くだけの作業がとてしもなく緊張する。

残り5 m

残り3 m

残り1 m

そしてついにすれ違う、その刹那の瞬間。

「へえ、面白いわね」

少女——曹操は目を細め、挑発的な笑顔で周倉を見た。

「失礼します。周倉、只今帰還しました」

「あ、お疲れ様です。周倉さん」

「お疲れ様でした。ご無事で何よりです」

劉備、雛里が笑顔で出迎え、続き一人一言つつ周倉に向け、ねぎらいの言葉をかけていく。最近雛里の頑張りによって、あれほど冷めていた態度もだいぶ和らいできていく。諸葛亮からの指示は相変わらずだが、それでも多少なりともフォローは入ってきていた。まさに雛里さまさまである。

「遅くなりましたがご報告をさせていただきます。周倉隊は軍師殿の指示通り伏兵にて敗走してきたものたちを撃破、うち将を一人打ち取りました。既に大将は関羽様方に討ち取られていたそうで、たいして士気もなくこちらはほとんど無傷で戦闘を終えることができました」

「ご苦勞様でした。これでこの地域はおおよそ平穩を取り戻したと思つていただいて構わないでしょう。ですが……」

喜ばしいニュースであるはずが、皆なぜか一同戸惑いの表情を浮かべていた。理由は明らかであろう、その原因は彼女だ。

「はい、こちらの戦場では予定通りことが運んでいたのですが、ある一軍が援軍として駆けつけてくれたんです。それが、曹操軍」

「曹操軍ですか」

曹操、言わずもがな劉備と並び三国志の超有名人、『霸王』と称される人物。そして周倉にとつては恐怖の対象。

「それで、何が問題だったのでしょうか？」

周倉の問いに諸葛亮はちらりと関羽を見て、酷く、とても言いづらそうに口を開いた。

「そ、曹操殿、彼女は愛紗さんに一目ぼれしたみたいでしゅ」

「・・・は？」

関羽は怒りを、劉備は苦笑いを、張飛は笑顔で、諸葛亮は諦観を、雛里は頬を赤く染め、北郷は疲れた表情を浮かべた。そして周倉は開いた口が塞がらなかつた。

「えーと、それはその」

「・・・曹操さんは以前から『女性にしか興味がない』ようで。戦場で戦う愛紗さんの姿を見て是非とも欲しい、と思ったそう。ついさきほどこちらにやってきて、熱い勧誘をしていきました」

「要するに引き抜きつてことですか」

「あ、ありていにいえば」

「私が仕えているのは桃香様ただ一人、あの曹操につくなんてありえません」

「まあ、そうですね」

鼻息荒くしている関羽をどうどうと宥める劉備と北郷。

「断るんですよね？じゃあ何か問題でも？」

「ええ、まあ問題がこれで終わらなかつたというべきですか。周倉さんも以前から物資の不安を抱えているのはご存知ですよね」

もちろんそれは当然である。ほぼ自転車操業のようなことをしている劉備軍は常に不足気味、そのための任務をどれほどこなしているのか。そういう意味では周倉隊は影の立役者といっても過言ではない。もちろん知る人間はごくわずかに限られてはいるが。

「それで、ですね。曹操さんは愛紗さんを渡せば物資の支援をしてくださると言いだしたのです」

「つまり、足元見られたと」

さすが霸王、非常にエグいところを狙ってきている。関羽という絶大な戦力を保持しているからこそその劉備軍。だがその戦力を保持していても軍としての体裁を保たなけ

れば意味はない。関羽を残しジリ貧の中戦い続けるか、関羽を渡し戦力が低下するものの潤沢な物資で戦い続けるか。

長い目で見れば関羽を手放すのは悪手、だがその長い先に行けなければそもそも意味がない。それに人一人手放すだけで援助が入るのならばむしろこちらに有利な条件である。

「ひとまず返答を保留させてもらっています。そしてその期間共闘を申し込まれましてこちらは受けました。多少援助も頂けるようですし悪い話ではないんですが・・・」

「うぐぐぐぐ」

「葛藤があるからこそ、関羽様はあれほどイラついているわけですか」

「そういうことです」

関羽の内心は複雑であった。自分が身を捧げればひとまず劉備軍の危機はさる。だが自分がいなくなれば劉備の身の安全もわからず、誓いを破ることにもなりかねない。あちらを立てればこちらが立たず、関羽の苦悩は続く。

「で、御使い様はなぜあれほど気落ちしてらっしゃるのです？」

その関羽の横、北郷は関羽をなだめつつ、時折深い深いため息をつく。最近自信というものを備え始めていたように思えたのだが、その影も見えやしない。

「ええっと、曹操さんに色々言われたんでしゅ」

ぱたぱたと魔女帽子を抑えつつ雛里が駆け寄ってきた。その内容は中々にひどかったらしく相当こたえたようだった。関羽を絶賛する横で、酷評される北郷。ああ、確かに自分の主たる人間を酷評されれば余計行きたいとは思わないだろう。

「周倉さん……」

いきなり声をかけられ、周倉が驚いて背後を振り返ると北郷がそばに寄ってきていた。

「俺、そんなにブ男かなあ……頼りなさそうに見えるかなあ……ダメ人間に見えるかなあ……無能かなあ……」

「そ、曹操殿は男にいい印象を持っていないみたいですし、そんなに落ち込まなくても良いかと思います」

「そ、そうかな？」

「それに御使い様だからこそ、皆ついてきてるんですよ。もし私が御使いであったとしてもきつと劉備様はついてきてくれなかったでしょうし」

「そ、そうだよご主人様。私、ご主人様以外が天の御使いだなんて認めない。ご主人様じゃなきゃ、いや、だよ」

「そうです。ご主人様だからこそです！」

「お兄ちゃんはおにいちゃんなのだー」

あーアホらし。

皆からはやし立てられ徐々に自信を回復していく北郷。自分で言っておきながら微妙に納得できないが元気が出たのならばよしとしよう。周倉は微妙に傷ついた心を雛里の頭を撫でることで癒す。その当の本人である雛里はなぜ撫でられているのかわからないものの、何も文句を言わずされるがままとなっていた。

グダグダになったためにひとまず解散となり、自分の天幕へと戻る。その隣には雛里も付いてきていた。

「ん、ふっ、せいっ！」

剣を一つ一つ確かめるように振るう。大量生産される一般兵が持つている剣ならいざ知らず、この剣には独特の癖のようなものがある。それは武将個人に合わせて作られているためにできている癖なのか、それとも元々作られた際に既にあつたのかはわからない。ただ言えるのは今のままでは自分ではまだきちんと振れないということ。

故に身体を最適化、なじませるために何度も何度も剣を振るう。

「あわわ、すごい、です」

「ん、わかるの?」

「はい。私はあまり武に詳しいわけではありませんが、その剣がかなりのものだということがわかります。．．．あ、誠さんが見劣りするってわけでは．．．」

「見劣りしてるよ。だからこそ訓練してるわけだしね」

ほぼ一時間、動かし続けていた身体を休めるため剣を地面に突き刺し、訓練の様子を見ていた雛里の隣に腰を下ろした。

「あ、誠しゃん。これどうぞ」

「ん、ありがとう」

噛んでしまった雛里をスルーしつつ手渡されたタオルで汗を拭う。タオルというほどふわふわしてるわけでもなく、本当に汗を拭うといった代物であるが用途はさまざまなくはない代物である。

「劉備様は曹操殿の申し出を受けそう?」

手持ち無沙汰となった周倉は先ほどあったことを思い返す。どんな会談であったかわからないが、劉備という人物を多少知っている周倉はありえないと思いつつ尋ねた。

「恐らくお断りすると思います。誰よりも、仲間を大切にしている方ですから」

「そう、だね」

「でもそうすると物資の問題が解決しません。どうにか曹操殿から引き出さなければなりません。その妥協点を見つけてるのが私たちの仕事だと思っています」

「軍師殿たちの腕の見せどころだな。期待しているよ、鳳統軍師殿」

「あわわつ、あ、頭撫でないでください」

ぐりぐりぐり、雛里の頭を撫でる。急に頭を揺らされ目を回してしまっているようだ。大事な役目ではあるがあまり深刻になってもいいことはない。これくらいがきつとちようどいいと思う。

さて再開しようと思ひ、腰を上げようとしたそのとき、一人の男が現れた。

「や、周倉さん」

「御使い様、どうしてこちらへ?」

「周倉さんがここで訓練してるって聞いてね」

突然現れた北郷の手には木刀と水筒、タオルがあり、地面に置くとグーッと背伸びを

したあと身体をほぐし始めた。

「俺も混ぜてよ。たまには身体、動かしたくてさ」

「はあ、まあいいですが」

柔軟している北郷の横で再び剣を取り振り始める。一度休憩を挟んだおかげで無駄に込めていた力もそげ落ち、先程よりもいい感じだ。

「あれ、それ新しい剣？」

「はい。此度の戦で敵将が持っていたものです。捨て置くにはもったいないと思いましたが」

「すごいな。俺じゃそんな大きな剣振れないよ」

そう言うって隣に立ち、木刀を降り始めた。剣道をやっていただけと聞いただけあって余計な力みなく、素直に振れている。筋力、基礎体力もそれほど悪くはなさそうだ。まあこの世界に在るだけでも体力はある程度付く。加えて曲がりなりに軍事行動を共にしているのだからなおさらだ。

「さすが御使い様ですね。素直ないい太刀筋だと思えます」

「そうかな、ありがとう。それとき、御使い様なんて呼ばずに、一刀でいいよ」

「そんな、恐れ多い」

「うーん、そんなもんかなあ」

天の御使いと名乗った時点で本来ならばこんなことも許されないので、そう言っても良かったが黙っておいた。劉備も北郷もこの隙の多さが逆に親しみを集め人気の一旦となっているのだから。

「あ、そうだ周倉さん。模擬戦やろうよ」

「はあ、さすがにそれは危険ではないかと」

「そ、そうですね」主人様」

雖里も周倉とともに否定に入る。剣を降るだけならまだしもさすがに模擬戦では怪我、最悪死ぬようなことだってあるかもしれない。

「うーん、愛紗と訓練するときには最後に模擬戦やつてるから大丈夫だって」

むしろ関羽と模擬戦をやっている時点で凄。であればちよつとくらいやつても問題ないかもしれない。もちろん真剣でやるわけじゃないし、手加減をすれば大丈夫であろう。

「わかりました。怪我しないように注意しましょう」

「あわわ、しゆ、周倉さん」

「よつし、やろうやろう。愛紗と模擬戦やると文字通り死に物狂いになるからさあ」

「ああわかります、実際死にかけましたし。加減知らないし根性論やめてほしいですよ。気合があればなんとかなる的な、頭悪いといつかなんといつか。あんな細腕で優月

刀振り回してる時点で自分が異常だっていうことに気づいて欲しいです」

「だよな。せめてもう少し段階踏んでくれれば」

こんなところで意気投合、つい口が滑る滑る。剣を収め木刀に持ち替え、さあ始めようか、そう思ったとき。

「ほう」

背後で聞いてはならない声があった。周倉の背後を確認できる北郷は既に顔を真っ青に染め、絶望にて顔を引きつらせている。死んだ、そう思った。

「なるほど、二人とも死にたいんですね」

背後には修羅がいた。

そのあとの記憶は鮮明に覚えている。二人して関羽と模擬戦を行い、一方的に殴られ周倉は打撃により肋骨を折られた。北郷は関節を決められ、文字通りその巨大な胸に抱かれ昇天した。新しい武器に舞い上がり、関羽にやられたという同士に巡り合い嬉しさのあまり背後への警戒を忘れた周倉ももちろん悪い。

だが一体なんだこの差は。

お仕置き、つて感じである北郷に対し、周倉へは折檻。片方には愛があるのに対し、も

う片方にはそんなものの欠片も感じられなかった。

肋骨が痛くて戦闘に出れない。せつかく手に入れた剣をお披露目する機会もない。軟弱モノ、怒鳴られ、折ったのお前だろと言ひ返してしまひ、ヘッドバットを受け額から出血してしまつた。当の本人はピンピンしてるのが理不尽でならない。

もう一つ理不尽なのは、関羽だから仕方ないという風潮はやめてほしい。普通部下に怪我させて「すまん、悪かつた。次からは注意する」つて子供か。実はこの世界は世紀末並に無法地帯なのかもしれない。

「ちよつと替わりなさい！華琳様が穢れるわ」

「うつさいエセ猫耳。替われるもんならさっさと変わつてやるわ！」

更には人が人で暇人だからという理由で曹操のところまでお使いに行かされていたりする。女尊男卑が特に激しいこの軍においては使者であつても男であれば扱いが悪い。格下である劉備の使者であることも拍車をかけている。曹操なんかは関羽ではなく周倉が使者としてきたと知ると明らかにやる気をなくすほどである。

「桂花。楽しそうなどころ悪いけど、もう少し静かにしてちょうだい」

「そ、そんな楽しそうだなんて華琳様っ」

「悪いわね、周倉。もうしばらくその体勢のままでもいいさ」

「・・・了解しました」

そして今、周倉は両手両膝を地面につき、曹操の椅子となっていた。その姿を見た曹操は嗜虐的な笑みを浮かべる。それは酷くあくどい笑み。

そう、周倉があまりここに来たくない理由、とある事情により曹操に対し絶対服従となっているのだった。

虎の尾を踏んだどころか噛み切った

時間はしばし遡る。

「何か、言い残すことは？」

戦場は汚い。人と人が殺し合う場なのだからそれは当然のこと。殴り、殴られ、斬つて、斬られ、血と肉と、その他のおぞましいもので溢れかえる。

「劉備様に一言、私も、あなたの描く夢を、ともに、見たかった、と」

劉備軍がその華々しい勝利に酔いしれている裏で、作業的に、機械的に執り行われる儀式。右腕は原型をとどめず、左足を失った男の最後の言葉を冷え切った心で聞いたふりをする。

「伝えよう。．．．お疲れ様」

振り下ろされる刃、男は痛みもなく逝った。余韻に浸ることなく振り返ると呼吸を荒くし、期待満ちた瞳でこちらを見つめる男たち。彼らは誰も彼も、もう助からない。痛

みとともにただゆっくりと死を待つだけの存在。

慣れとは恐ろしい、そんな彼らの命を絶つことにも何の感慨もなくなってしまった。

「安心しろ、今樂にしてやる。覚悟ができたものから、笑って逝け」

周倉は、心にもないことを思いつつ、手に持った刃を振りおろす。

飛び散った血は、本人の気付かぬうちに固く硬くこびり付いていく。

戦場で怪我を負ったものはどうなるか。普通ならば負傷者として後方に送られ、本拠地等にて治療を行うだろう。だがここは劉備軍、流浪の、義勇軍。

拠点を持たぬ劉備軍はけが人が帰る場所も、そもそも移送する余力もない。例え助かる怪我でも満足に治療することもできず、応急処置すら正しく行う知識さえない。怪我は悪化し、最悪そのまま戦場へと趣いた彼らは満足に戦うことすらできずに討たれることさえある。

ある種怪我をしたら終わりのデス・ゲームなのだ。後ろ盾がない、支援がない恐ろしさを劉備軍に来てから散々味わったものだ。

そして今周倉が行った儀式。それはもう助からないであろうと判断されたものたち

への救済という名の切り捨て。未来の医療技術を知っている周倉からすれば彼らは死人ではなく、ただけが人だ。しかしここは違う、希望など、ない。

足でまといを連れて歩けるほど、劉備軍は強者ではない。ある種自転車操業とも言える彼らは立ち止まったら死んでしまう。生きるには、戦い、勝ち続けるしかない。だからある一定のラインの負傷したものを切り捨てていくしかない。

さて、弱者のために立ち上がった劉備がそんな決断をするだろうか。答えは否。彼女ならば最後まで連れて行こうとするだろう。

ではこれは北郷の指示か、答えは否。彼ならば未来の知識を使い、何とかしようと努力すだろう。

ならば誰が実行できるだろうか。答えはただひとり、諸葛亮である。時には非情とも取れる策を行い、ただ劉備を飛翔させようとする彼女が内部崩壊を許す訳もなく、ただ冷徹に命令を下しただけのこと。おそらく劉備たちには負傷した兵を彼らの村に返した、とでもいつているはずだろう。彼ら義勇兵の死は親族等に伝えられることはなく、あるのは彼らがついていった劉備軍が華々しい戦果を上げたという噂のみ。その噂を耳にするたび息子が、娘が今も劉備軍の一員として頑張っているのだろうと無事を祈っているのかもしれない。

これが義勇兵の末路、せめて苦しまないようにというのは、諸葛亮にとっては最後の

良心だったのかもしれない。

では何故周倉がこんな役割を行っているか。答えはいつものことである。

義勇軍として参加したものに苦しまずに逝かせるような技術を持ったものなど皆無と言っている。その技量に到達しているのは関羽、張飛、周倉の三名のみ。そして関羽や張飛がこのような役割を行うはずもなく。

必然的にその役割は周倉へと回される。関羽はなにやら違和感を感じているようだが、現在のちよつと険悪な関係ではむやみに突っ込んで来ないだろう。ちなみにこの行為が明るみになれば恐らく諸葛亮は当然のごとく周倉の独断として処理するであろうことは想像にかたくない。

「隊長、お疲れ様〜」

「隊長？なんのことかな。私は謎の覆面エックスであるぞ」

「えー、訳わかんないっすよもう」

血でむせ返ったこの場に似つかわしくもないのんびりとした声、周倉と同じく覆面をつけた男女が現れる。彼らはこの死体の片付け役だ。いくらなんでも埋めることまではさせられないとわざわざ志願してきた気のいい奴らだ。

「お前らはさあ、俺がこういうことやっぺんの見てなんか思わないわけ？」

「そうっすね。できれば俺は隊長にこうやっぺ殺されるよりも、天和ちゃんの胸で窒息

して死にたいっすね」

「私は、地和ちゃんの太ももに挟まれて窒息がいいな」

「いやいや、そういうことじゃねーから。相変わらず歪みねえわお前ら」

男だけでなく女性までとりこむ張三姉妹恐るべし。だからこそこまで勢力を拡大できたわけだが。

スコップっぽい何かで地面を掘り進める。今日はいつもより多いのが少し気が滅入るところだ。

「まあ窒息は冗談として」

「太ももに挟まれたいのは本当なの？」

それほど良質な太もものだろうか。劉備軍はミニス力率が高い上に見事なスタイルなものだから眼福なのだが、それ以上のもがあるというのだろうか。

彼女はにじしと笑って周倉のツツコミを軽やかに回避すると、少しだけ真面目な顔して笑いかける。

「こいつら、穏やかな顔してるからいーんじゃないかな？隊長がやってること、間違っていないって思うよ」

「同感っす。汚れ役上等じゃないっすか。ほら、もう身も心も汚れてるわけですし」

「心はともかく身はまだ汚れてないよ?!」

「えっ……隊長。よければ私が——」

「同情?! 同情なの?! 是非ともお願いします!」

「いい娘を紹介します。うちの村の女性は皆器量良しですよ。——あと20ほど若ければ」

「そんなこつたらうと思つたよ! 返せつ、俺の純情返せ!」

目の前に戦友の死体を前にして3人笑い合う。この場ではありえない穏やかな光景、果たしてこの光景を生み出せる人間はこの世界では何人いるだろうか。

戦場では敵を多く殺せば殺すほど英雄と呼ばれる。では周倉のこの行為は果たしてなんと呼ばれるのだろうか?

「まあ決めるのは俺じゃないしな」

結局のところそれは解釈によつて決まるのだから、本人が考えても大して意味はない。ただ願うのならば、一人でも表面の出来事を見るだけでなく、周倉を理解した上で判断して欲しいものだと思う。

「フフツ、面白いものを見せてもらったわ」

周倉達三人が立ち去ったあと、木の上から危なげなく降り立った二人の影。

「あれは異常です。彼らの行為は我らにもままあること。ですが人を、それも味方を殺めてあの精神状態でいられることが私には信じられませんが」

信じられないものを見た、その表情は雄弁に語る。それほどありえない光景と言つていいのだから。

「ええそうね。誰にも知られず、主人にも理解されず、自分の手を汚してなお、笑顔で笑いかう、か。お気楽そうな劉備達をみてよくここまで生き残ってきたと思つたけれど、彼——周倉が劉備軍の裏の顔といったところかしら」

甘い理想、潔癖な意思。それを貫けるほどこの世界は甘くない。劉備達の様子を見るに彼の行為を知っているのは軍師たる諸葛亮くらいか。いや、これほどのようなことであれば指示を出しているのは間違いないだろう。仮に劉備たちに知られるとすれば、周倉の追放は確実、最悪極刑もあり得る。

笑いが止まらない。彼らは理想を掲げておきながら、裏ではその理想を踏みにじつて戦い続けているのだから。まさにその犠牲者たる周倉、劉備が救いたいと願つた者は、すぐ足元にいる——

「華琳様。彼らのことを劉備たちに伝えるおつもりで？」

「まさか。知れば劉備は二度と立ち上がれない。自ずと関羽も表舞台から消える・・・それを私は良しとはしないわ。それに劉備は精神的に脆くとも、その徳は本物。大成すればいずれ私の前に立ちはだかる、大きな壁となるでしょう」

「壁となることがわかっていながら、放置する、と？」

誰よりも華琳のことを理解していると自負している夏侯淵——秋蘭は笑みを浮かべて確認するように尋ねた。尋ねられた当の本人も視線の先、ここから遠く離れた龍日に向けてエールを送る。

「ええ。我が覇道、困難な壁が立ちふさがるからこそ輝くの。劉備、あなたは多くの犠牲の上に生かされているの。だから、その犠牲の分だけ大きく羽ばたき、私の前に立ち塞がりなさいっ」

定期的に開かれる劉備軍會議、それはほぼお茶会と化したものである。関羽や諸葛亮などからわかりやすい説明を受け、それに対する受け答え、そして最後に締めの一言をもつてして閉会、そのままお茶会の流れとなる。そしてその間はわずか四半刻にも満たない。

リーダーである劉備は信頼か、はたまたよくわからないからか、大雑把な目標を掲げるのみで他は諸葛亮などに任せつきりだ。それは正しい判断なのである。劉備は私塾で勉強しているとはいえ、より知識豊かな諸葛亮が、武力に優れた関羽がいるのだから専門家たる彼女らに任せたほうがいい。

だがそれはよいことばかりではない。

「すみません。前回議題にあげた救護訓練についてなんですが」

「えーと、なんだっけ朱里ちゃん」

「周倉さん。その件については今はまだ時期尚早、今はできないという結論に達したと思うんですが。高度な医療を教えるには知識も時間も資材も足りません」

前回少しでも部隊消耗を防ぐために出した提案・・・それは諸葛亮による有無を言わさぬ笑顔で拒絶。そも、劉備はそんなことあったっけと思っても出せず。

「ですが!」

「既に決まったことだ。……まったくお前は隊長になっても成長していないな。いやむしろ悪くなっているんじゃないか?」

「えーと、ごめんね周倉さん。私は朱里ちゃんが必要ないならまだいらなかなーって。ね、ご主人様っ」

「あー、うん。救護訓練はいいことだと思っただけど、朱里ができないってことはできないんじゃないかな? 悪い、できるだけ早く訓練できるようにはするから」

諸葛亮のできないの一言は、絶大なる信頼によつて支持される、そうよほどのことがない限り。

「では、もう少しうちの部隊にも物資を……」

「各部隊の装備、食料等は適正に振り分けています。……物資が少ないのは周倉さんの部隊だけではないのですから、我が儘を言わないでください」

「あまり言いたくはないがお前の部隊は戦果が乏しい。もちろんその分物資の振り分けも多少なりとも影響が出てくるだろう。お前の指揮次第で、頑張り次第では増加できるように取り計らおう。精進してくれ」

「あれ、そうなの? なら仕方ないよね。頑張った人が報われなくちゃ!」

「ではこれで会議は終了ということ。鈴々ちゃんも我慢の限界のようですし、お茶に

しましよう」

「朱里、今日のお茶菓子はなんなのだ?! 鈴々もう我慢できないのだー!」

諸葛亮、彼女の判断によつて必要かどうか仕分けされる。もちろん周倉の意見なんて通らない、そんな平常運転の劉備軍である。劉備及び北郷は、関羽や諸葛亮から告げられるハリボテの真実しか頭に残らない。

いつものことと、こつそりと周倉がため息をついていること、和氣藹々とお茶会が始まる。テーブルや椅子のようなものはないため、地べたに敷物を引いてのピクニック形式だ。びよこびよここと慌ただしく動き回る諸葛亮と雛里、そうしてみるととても影でこの劉備軍を掌握しているとは思えない。全員に配り終わると、最後の最後に雛里が周倉へと湯呑を渡し隣に座る。

「ど、どうぞ!」

「ありがとう」

先ほどの諸葛亮の意見速攻却下を悪いと思つてかこつそりと雛里は自分の分のお茶菓子を周倉の前へと押し付ける。周倉はそれを見るとやんわりと突き返し、その頭を軽く叩いた。

全く自分の責任でもないのに気の使いすぎなのだ、この雛里という娘は。大方自分が意見を言えるほどしつかりしていればこのようなことにならなかつた、とても思つてい

るのだろう。多少はそのとおりかもしれないが、だからといって雛里から毎度毎度謝られるのはこちらの気分としてはあまり良くはない。諸葛亮本人がするのならばともかく。

雛里はあまり活発に喋る方ではないので、このお茶会ではもっぱら聞き役だ。主に色々としやべるのは劉備や北郷たち、周倉や雛里は降られれば相槌を打つたりする程度だ。本当ならば参加しなくても良いのだが、雛里による少しでも皆との溝を埋めようという提案から参加することとなった。諸葛亮が相当渋つたらしいが、うまく劉備と北郷を味方につけたとのこと、その頑張りを無駄にはさすがにできなかつた。それに周倉はこのお茶会の光景は嫌いではなかつた。

「でねでね、ご主人様が頭を撫でてくれてね——」

軍事行動中、これといった娯楽があるわけでもなし、自然と話題は北郷についてということが多い。要するに自慢話だ。いかに北郷がかつこよかつたり、優しくしてくれたりと男からしてみれば、あつそうで終わってしまう話題だ。微妙についていきづらい。

故に周倉は別のことに集中する。それは先程から柔らかそうに形を変えるお胸様であつたり、チラチラと見え隠れする絶対領域であつたり。張飛以外皆ミニスカートで地面に座ればどうしてもそこに目がいつてしまう。戦場での凛々しさと共にある別の意味での無防備さもいいが、日常生活での笑顔の中のチラリズムもとてもいいものであ

る。

ちなみにこんな時関羽は鋭く、小ワザを駆使してこつそりと見るようにしなければあとでご褒美とは言えない仕打ちが待っている。ゆえに全神経を集中せざる負えないのだ。

「——で、周倉さんお願いね」

「えっ」

だから突然名前を劉備から呼ばれきよとんとしてしまふ。完全に集中しすぎた。

「はあ。戦場では気をつけてくださいいね」

「はい、すみません。で、お願いってなんですか?」

諸葛亮の残念な人を見る視線、今回は周倉が悪いため素直に謝った。

「もう一度説明しますね。曹操さんから劉備軍も曹操軍も連戦続きだったために補給と休息を兼ねて近くの街にしばらく逗留しないかという提案がありました。そこでご主人様と桃香様とで支援を求めようかと思えます」

「それは曹操殿があまりいい顔をしないのでは?」

「いえ。これは元々曹操さんからの提案です。恐らく桃香様に恩を売っておきたいということと、こちらの情報が欲しいといったところでしょうか」

戦闘面ではない、政治面やそれ以外の部分が見たい、ということだろうか。確かに劉

備のカリスマは現状戦場では發揮されない。そもそも最前線には出てこない。その未知数の中、劉備に興味を持った曹操の方が異常なのだ。

「で、そのお願いなんです、その会談に行くまでの護衛をお願いしたいんです」

「お二方の護衛、ですか」

劉備軍の生命線、正確に言えばここにいる誰も彼もなのだが、何故にそんな大役が回ってくるのだろうか。

「いえ。今回出向くのは桃香様、ご主人様、私、愛紗さんの4人です。さすがに愛紗さん1人では3人を同時に守るのは大変ですし、そういった場で鈴々ちゃんは不向きですから」

この義勇軍の核である天の御使いと劉備、既に名高い関羽に交渉役として諸葛亮、人選は妥当だ。怪我がまた治りきってはいないが、よほどの大物が出てきたとしても関羽がいるし、現段階の劉備軍を執拗に狙う可能性はそこまで高くない。いや天の御使いを名乗っている時点で非常にまずいことはまずいのだが、現状で出てくるやつに遅れをとるようなことはまずないだろう。

「そういうわけなのでお願いします」

いつもの有無を言わせぬ笑顔を携えた諸葛亮を見て、何言っても無駄ということも早々に周倉は悟ったのだった。

「あのー、もう帰ってもいいつすか?」

つい投げやりなセリフは、嬉しそうに腕を絡める劉備と関羽、二人を両サイドに抱え、しばし申し訳なさそうに苦笑いする北郷、ちよこちよここと不機嫌に後ろについてくる諸葛亮という衆目を集める4人に届くことはなかった。

さすがの美貌、見る人見る人が振り返る。そういう意味ではすでに交渉は優位に運んでいるといっても良い。すでに彼女たちが劉備軍の一員であるという噂が回っているだろう。美人はそれだけで得だ。

「周倉さん!」

「はあ、なんですか軍師様」

「男の人は大きい方がいいんですか?!」

「は?」

「だから、大きい方がいいんですか?」

「……どうでしょうね。御使い様でしたら小さいのも十分範囲内だと思えますよ」「はあ?! どうせ男は大きい方がいいんでしゅ! 適当なこと言わないでください!」

めんどくせえ……自分で既に結論出しているならわざわざ聞かないで欲しい。北郷の両隣を取られたからって何やつてるんだらうこの人は。先程からこちらに不機嫌をぶつけてくるのはやめて欲しい。

そうこういつている間に会談を行う場所までたどり着いた。すでに連絡は入れてあるため、外には物々しい人ばかりができています。今売り出し中の新鋭、劉備軍の面々をひと目見ようと集まった人達だ。

「では周倉さん、手はず通りに」

「……はいはい、了解しましたよ」

劉備、北郷、関羽が中に入ったところを見送ったあと、予定通り近寄ってきた諸葛亮が周倉に耳打ちをする。信頼できる関羽の部下二人にこの場を任せ、一人周倉は雑踏に紛れる。目立たぬように路地に入ると先ほどまで着ていた服を脱ぎ、着替える。

きつちりしていた髪をぐしやぐしやにし、土で少し顔を汚す。元々多少整ってはいるものの、土により隠れ、どこにでもいるモブの出来上がりだ。

「抜け目ないというか、姑息というか。褒め言葉なだけだな」

ここに来る前、諸葛亮に呼び出されていた周倉はある任務を言い渡されていた。

それは情報操作、劉備軍にとつて都合の良い噂を流すこと。この時代、噂というのは馬鹿にならない。地盤がない、他者からの支援によつて成立する劉備軍にとつて噂一つでその行動が大きく左右される。諸葛亮はきちんと押さえるべきところを抑えている、さすがとしか言いようがない。

「いやあ、劉備様つてすげえ美人さんだわ。おっぱいもこーんな大きくてな、俺が手を振ると笑顔で振り返してくれるんだぜ。関羽様も噂通りのカツコよさだったぜ。そして噂の天の御使い！ありやあ本物だぜ。見たことのないような服着て、文字通り輝いてるんだ。正しく天つて感じだな。あ、天才軍師諸葛亮？いやいや全然そうは見えねえ、ペツタンコで未だに蒙古斑がお尻にありそうだったぜ！」

庶民が多そうなところ、親しげに溶けこみ。周倉は時に熱狂的に、興奮気味に、情熱的に劉備軍を褒め称え、時々諸葛亮の嫌味を交え面白おかしく吹聴していく。それを聞いて一人、また一人と老若男女が会談を行つている場所へと押しかけていく。

次々と場所を変え、服装を変え、諸葛亮の悪口を変え、面白おかしく宣伝していく。やはり人に話を聞いてもらうのは気持ちがいい、溜飲がかなり下がった気がする。

「その御仁、面白い話をしているわね。よければ私にも聞かせてもらえないかしら」
そう言つて周倉の許可なく同席する人物。頭からフードを被り、表情が見えない。怪

しいことこの上ない格好だ。声質から言っておそらく女。

「いいけどさ、顔を隠してっていうのかさすがにちよつとなあ」

「あらごめんなさい。私の顔、酷い火傷があつてとても人には見せられないの。悪いけど勘弁してくれないかしら」

「火傷か、なら仕方がないな」

もちろん額面通りに受け取るようなことはない。怪しき爆発、だがそれでも接触してきたというものは何かしら意図があるということだろう。周倉は素直に乗つかることにした。隠して剣も持つてきている、最悪な事態にはならないだろう。

「で、誰の話が聞きたい？劉備様かい？それとも諸葛亮がいいかな？」

「では関羽についてお願いするわ」

「ああ」

選ばれたのは劉備でも、北郷でも、諸葛亮でもなく、関羽。戦場にて圧倒的な存在感を放つ劉備軍の光。

「人に敵しく、自分に敵しく、そして劉備様と御使い様に甘く、その二人に絶対の忠誠を誓う臣下の鏡。一度戦場に出れば、その美しい髪をなびかせ敵味方問わず魅了し、ひと振りですべてを薙ぎ払う軍神。彼女ならばいずれ100万の正規軍の指揮さえもこなすだろう、こんな義勇軍に置いとくにはもつたないな・・・と最後の一言は忘れてくれ」

嫌がおうにも熱がこもる。色々あったとしても、戦場で戦う関羽は周倉にとつて憧れの存在なのだ。

「……他には何かないのかしら？どんな些細なことでも構わないの」

「ふむ、関羽様は見た目と裏腹、かなり繊細なようです。先日野生の猫を見かけて、思わず手を出してしまい引つかかれたうえ、逃げられてしまったことがあった。涙目になりつつも、気丈に振舞っておられ、その姿は戦場では見られない愛くるしさがああり、眼福だった。あと、先日御使い様に髪の毛を褒められたそうで、身だしなみを入念にするようになったようだ。いずれは美髪公などと呼ばれるかもしれないな」

「くっ、その涙目の姿是非とも見たかったわ。まあいいわ、いずれ……」

「いずれ？」

「なんでもないわ。動機はアレだけど、自分の身だしなみを整えるのはいいことね。関羽も女。戦場にいるからといって疎かにしていいわけではないものね」

一瞬なぜかゾクツとした。やっぱかかわり合いにならない方が良かったかもしれない、周倉は後悔した。

「おっと、そろそろいい時間だ。ちよつとこのあと用事があってね、ここでお暇させてもらうよ」

そろそろ会談も終わりがけだろう。不審に思われる前に戻らなければならない。

「ちよつと待ちなさい」

席を立とうとして、フードの女に呼び止められた。

「行く前に一つ。この街には劉備の他に曹操も来ているわね。あなたは彼女をどう評価するの?」

その質問に、むうと唸る。歴史上の曹操についての知識はあつても、この世界の曹操はちらつと見ただけ。あやふやな評価をするのはどうかと思うが・・・

「詳しくないからあまり参考にならないだろうけどな。・・・一言で言えば、化物だった」
「化物?」

「ああ。全てを包み込むような、安心できる存在感を放つ劉備様とは対照的に、全てを飲み込むような、圧倒的な存在感。そのすべてを見透かすような眼光は、とても人とは思えなかつた。頭がいいとか、力があるとか、そんな些細なものは異なる、劉備様とは似て非なる魅力を備えていた、と思う」

「——つ。ありが、とう」

「?まあ才があれば敵であろうとも受け入れる気概とか、無理矢理奪つちやおうとしたりとか、部下からしたら大変そうだな。と、参考になつたかな」

「ええ、面白いことを聞けたわ。あなたに話しかけて、よかつた」

「ごめんなさい、最後にもう一つ」

駆け出そうとした瞬間、呼び止められた。時間的に本当にやばい、いい加減行かないと間に合わなくなる。そうしたらきつと関羽と諸葛亮からお説教だ、メンドくさい。

「あなたは、曹操に仕えてみたいかしら？」

断るより先に来た質問、良かった、考える手間もいらぬ。

「無理。腹黒貧乳嗜虐趣味なお方は懲り懲りです。せめて劉備様くらい胸がなきややつてられないわー」

ある種曹操と諸葛亮は被るところがある。最近諸葛亮は周倉に対して無理難題を押し付けることを喜んでやつてるフシがある、というか雛里が悲しそうな顔で言っていた。そして曹操もDSには定評があるらしい。今のところ女性限定だが。

既に半ばトラウマになりかけている存在に仕えるなんてとんでもないことである。周倉は答えると。振り向くことなく走り去った。

背後で何か壊れる大きな音と、阿鼻叫喚といえるほどの悲鳴が上がった。

周倉は知らず知らずのうちに、虎の尾を踏むだけでは飽き足らず、噛み切ってしつていた。

自業自得

急ぎ着替えて戻った周倉を出迎えたのは静かに微笑む関羽と苦笑いを浮かべる劉備たちであった。周倉は、予定の時刻には間に合わなかった。

周囲の人だかりがいるにも関わらず怒涛の説教を始める関羽をどうかこうにか劉備と北郷によつてなだめ、周倉は頭を下げて謝罪する。先ほどようやく解放されて、周りから一歩外れたところで一息ついたそんな時、周倉の背後から忍び寄ってきたのは諸葛亮であった。

「お見事です。十分な成果でした」

「エグいですね、軍師殿。．．．わざと予定よりも早く切り上げましたね？」

「はわわ、た、たまたまですよ。周倉さんが予定通りの時間に戻ってくるのを見越してなうてことあるわけじゃないですか」

白々しい諸葛亮の否定、大勢の市民が集まっている中、先ほどのやりとりはいいパフォーマンスであったといえよう。警備という役目を抜け出した周倉に対し、規律を乱したものにその場でしっかりと罰を与える関羽、罪を犯したものでも次の機会を与えるという徳を見せつけた劉備、そしてその二人から「主人様と呼ばれ慕われる天の御使

い、感謝の言葉と姿勢を見せ頭を下げる。こちらから見ればひどい三文芝居だ。

だかその三文芝居を見て彼らを褒め称える人々がいる。関羽様は公正な方だ、劉備様は優しきで溢れている、そんな二人から信頼されている、さすが御使い様だ、と。

「周倉さん、ひとつ聞きたいことがあるんですが」

「はあ、なんですか？」

「私に向けられている評価、どういうことですか？」

首をわずかに傾け、ニツコリと微笑みを向ける諸葛亮。その普通の人なら可愛いと思える仕草を見て周倉は少しだけ怯む。だが実情の知らない観衆はその微笑みを見て歓声を上げた。

—— おお、あれが噂のちびっこ軍師、諸葛亮様か。

—— その可愛らしい見た目とは裏腹、味方に被害を出さず狡猾に敵を陥れる稀代の腹黒軍師らしいぞ。でもやっぱり可愛い！

—— あまりにも狡猾すぎて賊が泣いて謝ったらしい。恐ろしや可愛らしい。

—— 年齢も見た目通りじゃないらしいぞ。確認できるだけでも数年近く体型に変化がなく、身長も、胸もぺったんこ。もう絶望的らしい、だがそれがいい。

「何か問題が？」

「大有りでしゅー！」

諸葛亮はたいそう憤慨していた。多少なりとも脚色しているが大まかには間違っていない、と思う。これは俺のせいではなく、噂がひとり歩きした結果である。

「どうせ尾ひれがついたんでしよう。むしろ泊がついて良いではないですか。よかったですねえ、向こうで『妖女!』と拍手喝采してますよ」

「全然嬉しくないです!」

我ながらいい仕事をしたと自負できる。情報を笑うものは情報に泣く、出回る噂が常にあるものだとは限らない。こうやって尾ひれ背ひれが付くことによつて呂布の三万の敵を倒したとか赤兎馬は千里を駆け抜けたとかいふ伝説が生まれたのだろう。

その伝説の一つに携われたことを誇りに思う、訳はなかった。

「そー…うるさいでしー」

諸葛亮が怒れば怒るほどハイテンション人なつていく特殊性癖者達を見て、周倉はざまあという感想が顔に出さないようにするのに必死であった。

「皆済まない、我らはそろそろ陣に戻らなければならぬ。悪いが道を開けて欲しい」

関羽によるこの言葉に、周囲に集まつてきていた人々は残念そうな表情を浮かべながらも道をあける。その道を歩く劉備たちは振られた手を笑顔で振り返す。

その光景はさながらパレードのようであった。

そして劉備たちはその帰り道、一人の襲撃者に襲われた。

その襲撃者に最初に気づいたのは周倉であった。理由は単純、一番近かった手練が彼だったからである。恐ろしいスピードで迫る襲撃者が真つ直ぐに諸葛亮の方に向かっていると感じた周倉は、剣を抜きその間に身体を割り込ませる。周囲の兵士は先程までの穏やかな空気から一変、突然の出来事だったことに加え、そのあまりの速さに対応しきれない。

関羽はその場を動けなかった。襲撃者が一人とは限らない、自分が応援に行っている好きに劉備と北郷が狙われるということがないとは言い切れない、そう判断して対応を周倉に任せた。

——そして周倉は自分の失敗を悟った。

その失敗はもちろん諸葛亮の守りに入ったこと、などではなく襲撃者が諸葛亮に向かっていると錯覚したことであった。

襲撃者との接触、周倉はまずはその恐ろしい勢いを止めるべく守りを固めた。大振りなどしてしまえば簡単に抜けられてしまう。視認できる敵は一人、動きが止まればあつという間に囲まれてしまう。であれば周倉に構わず諸葛亮を狙いに行くであろうと予測してのことだった。

「かはっ！」

しかしその予測は外れる。襲撃者は周倉を抜く素振りを見せたものの急停止、ガラ空きになっていた周倉の脇腹に掌底を放った。

無防備なところに一撃、それも直接怪我をしていた場所ではなかったものの、衝撃は剣を取り落とすには十分なものであった。

「返してっ！」

「チッ」

そして周倉の手から滑り落ちた剣を拾おうとする襲撃者。その発した言葉でようやくその真の狙いを理解した。

諸葛亮ではなく、初めから周倉の剣に狙いを定めていたのだ。

周倉が無理な体勢から蹴りを放つも軽くよけられ地面に落ちた剣を拾われる。そし

て襲撃者はそのまま攻撃する意思を見せることなく離脱を図った。

「逃がすな、取り囲め！」

呆然としていた兵士たちに向けて、関羽の激が飛ぶ。その声によろやく我を取り戻したのか、武器を構え、その逃走を阻もうとする。だが倒すのではなく、逃げる襲撃者の体捌きによつてほとんど時間を稼ぐこともできず難なく抜けられてしまう。

「待てやゴリアー！」

そのまま逃げられた、と思いきやその僅かな時間によつて復帰した周倉が食らいつく。その口調は普段とは異なり、その怒りようがよくわかる。関羽たちにとっては初めて見る周倉の姿でもあった。

剥き出しのそれなりの重さのある剣を持っていたことも幸いした。襲撃時ほどのスピードが出せていなかったのだ。

「ツツツ……！」

周倉は届いた相手の腕を掴む……のではなくつまみ、捻る。

皮膚を捻られる、それは殴られる、斬られるとは異なる想像を絶する痛みだ。そしてそれは戦場で味わうことのほとんどない、未知なる痛み。痛みに強いプロレスラーですら鼻の穴にカラシをねじ込まれれば悶絶するのと同じように。

その未知の痛みに、襲撃者は声にならない絶叫を上げ、剣を取り落とした。周倉はそ

の隙を見逃さない。立ち止まったところにお返しと言わんばかりにローキックを放つ。よろけた相手の足を払い、肩を掴み、地面に叩きつける。

「カハッ！」

叩きつけられた襲撃者は、その衝撃で肺にあつた空気を吐き出させられた。周倉はそのまま腕を取り、関節を極め、そのまま流れるようにその腕をへし折ろうとして・・・

「待て！やりすぎだ周倉！」

関羽のストツプが入った。

「見事な捕縛であつた。だが最後腕を折ろうとしたな、それはやりすぎだ」

「あー申し訳ありません。完全に頭に血が昇つてまして」

「はあ、今後気をつけるようにしろ。そのまま殺しかねん」

先程から周囲の味方からの目が痛い。周倉に向けられたのは、あいつ切れたらヤベーよ、そんな視線であつた。確かに最後の腕を折ろうとしたところはまずかつたかもしれないが、こちらとしては危うく剣を盗まれるところだったのだから大目に見て欲しいと思う。

「で、コイツどうするんですか？処断しますか？」

「とりあえずお前は落ち着け」

猿轡を噛まされ、周倉をじつと睨みつける襲撃者……そいつはまだ年端もいかない少女であつた。だがある種納得であつた。あのスピード、正確な攻撃、フェイント技術、恐れを知らぬ度胸、どれもこれも一般人ではありえない。おそらく後世にまで名が伝わる者の一人、怪我をしていた周倉がまともに戦つていては分が悪かつただろう。逃げに徹していたからこそ、むしろ捕まえることができたと言える。

「とりあえず事情を聞いたらどうか」

「ご主人様」

「周倉さんも無事で良かった。でも女の子にあんまり手荒な事しちゃダメだよ」

「……善処します」

この世界では男のほうが強者、とは安易に言うことはできない。関羽や張飛など例外が存在し、一般兵にも女性も混じっている。権力者で言えばむしろ女性の方が多くいる。確かにこの襲撃者は少女であるが、北郷よりも周倉よりも強いかも知れない相手に手荒なことをせずというのがかなりの難題である。いい加減自分がいた世界とは違うことを理解して欲しいところであつた。

そういうと次に北郷はおもむろに襲撃者の少女の猿轡を外し、話しかけた。

「俺は北郷一刀。天の御使いなんて呼ばれてる。ガラじゃないんだけど。君、名前は

「？」

突然猿轡を外し話しかけてきた行動に少女は驚いた表情を浮かべた。だが、返事はせずにだんまりのままだ。じれた関羽が何か言おうとしたが、後ろに居た劉備がそれを止める。

「ね、君、なんで周倉さんの剣を狙ったのかな？よければ教えて欲しい。もしかしたら君の力になれるかも知れないし」

「ぐ、ぐ主人様っ」

関羽の制止を振り切り、北郷は笑みを浮かべながら訪ねる。

「君みたいなのがこんな襲撃者まがいのことをしたんだからそれなりの理由があつたんだと思う。でも理由があつたからといってやっていいことじゃないんだ。今回はこうして捕まるだけで済んだかもしれないけど、次はきつとやってこない」

「・・・」

「君を縛っている俺たちが信用できないかもしれない。でも俺たちだって好きで君を害したいと思っているわけじゃない。事情があるなら、話して欲しい」

「なんで、そんなに優しくするんですか・・・」

襲撃者の少女は総つぶやき、ポロポロと涙をこぼす。それを見た北郷は指でそつと涙を拭き、こう答えた。

「可愛い女の子が困ってるんだ、男としては助けなきゃいけないだろう？」
少女は顔を真っ赤に染め、初めて笑顔を見せた。

「その人、が持っている剣は私の家に代々伝わる剣なのです」

少女は落ち着いていたのか少しづつ話し始めた。少女が周倉に向ける視線は厳しい。明らかに腕をおろうとしたことについて根に持っているのだろう。もちろん周倉に謝る気はない。

「それが何者かの手によって盗み出されました。私は取り返そうと探し回っていたんです。そして今日、この街に立ち寄り、その人が持っていたもたつてもいられずに……」
「襲撃した、と」

周囲の視線が周倉に集まる。もちろんやましいことは何もないため、堂々と受け答える。

「御使い様が知つてのとおり、これは少し前に賊から手に入れたものです。そのまま朽ち果てさせるのはもったい無いと思いましたが。おそらくその賊が奪つたのか、はたまたさらにその族がどこからか奪ってきたのか、そこまではわかりませんね」

「ですね。彼が奪つた犯人ではないのは確かです。劉備軍として転戦してましたので、そのような暇は到底ありませんでしたから」

そう言ってフォローを入れる諸葛亮。だがその暇がなかった原因は大体あなたの指示だったんですけどね、と心の中で愚痴る。

「はい、残念ながらその人が犯人ではないと思います。目撃者の話では、大男が盗み去ったと聞いたので・・・でも、よかつたあ。ようやく、見つけることができました」

そう言って嬉しそうに涙をこぼす少女、周りも、よかつたよかつたと穏やかな空気になる。だが一人、周倉だけはこの流れの中穏やかでいられるはずがない。

「そういうことか。周倉、その剣、彼女に渡してやれ」

関羽の一言に、周りの皆が頷く。やはり周倉にとつて最悪の事態となった。

「ですが、その少女の言ってることが正しいとは限らないのでは？」

その流れに待ったをかけるべく周倉は問いかける。だが残念なことに、その程度では少女に同情している流れは変えられない。純粋な関羽や劉備、特に関羽には返したくないとダダをこねているように思えたのだろう。

「・・・おまえは何を言っているんだ？この少女が浮かべた涙が嘘だとしても？私にはそうは思えなかった。お前もみただろう？盗まれた家宝を取り戻そうとする、彼女の直向きな姿を」

「うーん。周倉さん、返してあげられないかなあ。そのこも困ってるだろうし。ね、お願い？」

「俺からも頼むよ周倉さん」

劉備軍のトップから請われる、実質的に命令と一緒だ。断る事なんて出来やしない。周倉はやるせなさから唇を噛み締める。

「お願いです、私、何でもします。どうか、返してください……」

畳み掛けるように言葉を綴り涙を浮かべつ少女。形勢は完全に決まってしまっていた。

俯く周倉の手から離れていく剣、縄を解かれ、北郷から渡された剣を受け取り笑みを浮かべる少女。ありがとうございます、と何度も感謝の言葉を口にする。

ああ、納得いかない。

賊から剣を回収したのは周倉。襲ってきた相手を殺さずに捕らえたのは周倉。そして元の持ち主に返したのも周倉。だがこうして感謝の言葉を、尊敬の眼差しを贈られるのは北郷。

もはや頂垂れる周倉を見ている者は誰もいない。ゆつくりと、その場を離れた周倉に氣づいた者は誰もいない。

「どうか、この御恩を返させてください」

「そうか、なら俺たちの仲間になつてくれないか？」

「え、そんな、ご迷惑に……」

「そんなことはない。あの時の身のこなし、実に見事であつた。我らも武将は少ない、お前ほどのものならば喉から手が出るほど欲しい」

「うん。お友達が増えるのは大歓迎だよ！」

楽しそうな話し声が入る。周倉にとつては最早どうでもよかつた。ただ、ほかの人よりも少しだけ鋭敏な耳が聞き取ってしまうだけ。いや、言葉として認識すらしていなかつた。だからこのあとの展開を、知ることがなかつた。

「あ、そうだ。君の名は——」

「そういえば——でした」

「せっかく——になつたん——ら、きちんと自己紹介しなくちゃ——」

「私——名は、周——です。不本——な——その——と同——名——です。あれ——どこに——
——んで——」

「あ、お帰りなさい、誠さん。あれ、ご主人様達はどうしたんですか？」

「ああ、ちよつといろいろあつてね。先に戻らせてもらつたよ」

一足先に陣に戻ってきた周倉は、こちらを見つけてとことこと歩いてくる雛里に向けて乾いた笑みを浮かべた。ここに戻るまでの間に多少の発散は出来たが、それでも気は収まらない。だが、それを他人に悟られるのはプライドが許さなかつた。

「そうでしたか。いえ、むしろちよつと良かったかもです」

「ん？」

ちよんちよんと手招きする雛里、それを見て周倉は膝を折り雛里が届く高さまで合わせる。最近雛里が使う、密談のサインだ。

「ついさきほど誠さん宛に書簡が届いたんです。それも極秘裏に」

「……どこから？」

秘密の書簡。残念ながら周倉は外部にそのようなものを送ってくる伝はなく、心当たりがなかった。わざわざ直々に、ということとは果たしてどういうことだろうか。現代であればラブレターなどという甘い期待もできるが、残念ながらここは残酷な世界である。

「・・・曹操さんから、です」

雛里の深刻な顔、思わずゴクリと唾を飲んだ。

「やばめ？」

「あわわっ、やばいです。申し訳ありませんが中身を拝見させてもらいました。そしてら中には“天、地、人”と一言」

”天、地、人”

それは明らかに天和、地和、人和を示したもの。つまり曹操は黄巾党の実態を把握していることにほかならない。そしてそれを極秘に周倉に向けて伝えた、その真意は。

「・・・曹操は俺たちに協力を申し出ている？」

「その可能性が高いかと」

周倉の元黄巾党の部隊が、信奉する張三姉妹のいる黄巾党を攻撃する理由は極僅か。張三姉妹を見限ったか、その三姉妹を助け出したいかのほぼ二択。そしてもし見限っているのであればその情報を主人に売り渡すのは必至。

そして曹操は劉備たちが張三姉妹を「知らない」ことを知っている。

「張三姉妹を」保護、できるところは限られています。そして曹操さんならばその条件を満たしています。彼女たちのこれほど人を惹きつける才、曹操さんの氣質を考えれば充分欲しがる要因です。裏切り売り渡す可能性はかなり低いかと」

「賭ける価値は十分あるということか」

いや、そもそも周倉たちに選択肢はない。劉備軍での保護は難しく、ひっそりと匿おうにも大軍を動かすことのできる曹操から逃げ切れることは不可能だ。

とりあえず会うだけ会ってみよう、そう雛里に告げるとこっそりと曹操の陣へと向かう。周倉の不在は適当に雛里がはぐらかしてくれるであろう。

張三姉妹の知らぬところで、彼女たちの運命が決まろうとしていた。

「ほらほら、もっと丁寧に扱いなさい。傷でも付いたらどう責任を取るつもりかしら」
「ぐぬぬぬ」

優しく、時には強く曹操の素足をマッサージしていく。時折あげる嬌声はなんと艶かしいことこの上ないが、正直しんどさが上回っている。猫耳の殺気立った視線もそれを

助長する。

周倉は今日もまた曹操のところに呼び出され、奴隸としてご奉仕させられる日々なのである。

あのあと曹操陣営に向かった周倉は、身に覚えのない理不尽な暴力を受けたあとである契約を交わした。

『そちらは張三姉妹を助けたい、こちらは彼女たちを手に入れ、もとい保護したい。充分共闘できると思うのだけど、どうかしら？』

その言葉から始まった密談は想像よりもトントン拍子に進んでいった。

唯一といってもいい協力的な元黄巾党を率いた周倉の部隊、黄巾党に紛れ込みやすく、張三姉妹を探し出すのも容易い。内情を知りつつも他者を出し抜くべく、より迅速に、より具体的に行動を起こすことができない曹操が欲しがっていた駒。

そして現状唯一といつていい、実情を知り張三姉妹を保護できるだけの実力を伴った勢力。才を愛し、その才を持つ三姉妹を迎え入れるだけの度量がある曹操は保護先としては申し分無かった。もちろん裏切る可能性はあるものの、現状どの選択肢よりも可能性があつた。

『無事に保護できれば、そのまま周倉隊をこちらで受け入れましょう。この戦いが終わ

れば義勇軍である劉備軍は解散、そのままこちらについても問題はないでしょう。願うならばそのまま彼女たちの親衛隊としてもいい』

成功すれば彼女たちの傍にもいられ、就職先まで斡旋してくれるという。まさに旨すぎる話に裏があるのではないかと勘ぐるのも仕方のないことかもしれない。それにどこからか漏れれば一大事、ハイリスクである。

『あら、疑り深いのね。でも私は彼女たちにはそれだけの価値があると思ってる。危険を冒しても手に入れたい。それにそもそもあなたたちに選択肢はあるのかしら?』

そう、選択肢はないのだ。既にこの話は受けざる負えない。断れば待ち受けるのは破滅のみ。

『契約成立ね。あ、あと周倉。あなた私の奴隷だから』

最後の一言、まるでついでのように言われた奴隷宣告。断れないのを承知で、契約に不純なものを追加するのはいかながなものであろうか。

「で、関羽は何が好きなの?」

「そうですね。年相応に甘いものとか可愛らしい動物とかですかね。本人は隠したがっているみたいですけど」

「なるほど。食事にも誘ってみようかしら」

「そのときは張飛にご注意を。阿呆みたいに食べまくりますので」

「張飛の武力には興味あるけど、張飛自体には興味ないわね。それと、例のあれは手に入れたのかしら？」

「無理に決まってるでしょう。死ねど？そもそもあなたが手に入れて嬉しいんですか」
「嬉しいわ」

あれとは、関羽の下着のことである。主要の人々の荷物は嚴重に管理され持ち出すことなんて到底かなわない。というかそんなものを要求してくる曹操に周倉はドン引きである。

「ちっ、使えないわね。まあいいわ、そっちの首尾はどう？」

「上々で。ちょうど良く干されましたし、諸葛亮もあれこれ面倒な仕事を押し付けてますよっと」

その一環がこの使いっぱしりという名の曹操の伝令役である。

あの日、周倉は様々なものを失っていた。剣、地位、そして名。

あの時の襲撃者の少女、彼女こそが本物の周倉であった。もちろん他者からすれば本物も偽物もないのだが、その愚直なまでのまっすぐな姿勢は関羽の好感を得ただけでなく、他の者にも絶大な支持を得ていた。あれよあれよという間に劉備軍に馴染み、周倉

といえば彼女を指す言葉になっていた。元々周倉隊以外はそれほどいい印象を持たれていなかったためにほかの兵士たちからしてみれば印象を塗り替えるには十分であった。

かくして周倉は居場所を奪われ、その存在自体が危ぶまれるような状況になっていたのである。ある種開き直るのも無理はなかった。

「できるだけ早く作戦を成功させてこちらに来ることをオススメするわ。私なら劉備軍よりも高くあなたを買ってあげるわよ」

「・・・奴隷状態で高く買っていると言われましても。私、何かしました?」

「さあ、どうかしらね」

ふっつ、と笑顔を滲ませる曹操を見て周倉はため息をついた。果たしてどちらが幸せだろうか。先程からこちらを睨んでいる猫耳を見ると、こちらも命の保証はない気がしてならない。

「さて、そろそろ帰りますよ。形だけとはいえそろそろいい時間ですし」

「あらもうこんな時間ね。楽しい時間というのはすぐに終わってしまうものね」

誰にとつて楽しいか、周倉は考えることを放棄した。そんなもの考えるまでもないことだ。

「ということでは手はず通りに。よろしくお願いしますよ?」

「勿論、誰に物を言っているのかしら？」

「申し訳ありません。そう言われて何度も裏切られているもんで疑り深くなっているんですよ」

諸葛亮とか、諸葛亮とか、諸葛亮とか。

黄巾党本体も補足し、決戦は近い。その際に周倉隊は諸葛亮から重要な役割を任されていた。勿論表立って言えるようなことではなく、ある種卑怯と言えるかもしれない。

その役割とは、黄巾党に紛れ、その首領である張角なる人物を捕らえろというものであつた。なんたるムチャぶりであろう、周倉隊は僅か100人程度であり、紛れ込んだことが発覚すれば殲滅されるのは目に見えている。確かに追い詰められている黄巾党に紛れるのは、元黄巾党の周倉隊には難しくないかもしれない。だがそれは本来特殊な任務を受けた隠密とか草の仕事ではないのか。

つまり、そもそも諸葛亮は成功するとは思っていない。黄巾党に混乱を生じさせるために一石にするつもりなのだろうと、泣きながら雛里がそう言つて頭を下げていた。

だが、その危険な役割をあえて周倉は了承した。張三姉妹を保護するならばそれくらいこなせなければいけない。その任務を軸に、曹操と作戦を練つた。

作戦内容は単純、曹操軍が黄巾党の撤退ルートをあえて残して待ち伏せし、そこを捕らえるというもの。周倉隊は案内役兼護衛役だ。混乱した黄巾党の凶刃によつて倒れ

たなんて笑えないし、他の勢力が迫ってくるかもしれない。劉備軍は作戦開始前の段階で抑えられるが、その他何が起きるかわからない。諸葛亮ならば配置の段階でもしかすると察するかもしれないが、曹操軍に抑えられてはどうしようもないだろう。ざまあ。

「ええ、私がここまでやるんだから失敗は許さないわ。必ず無事に送り届けなさい」

曹操の力強い言葉が、非常に頼もしかった。

部屋を出ようとしたとき、猫耳に蹴られた。彼女はこういったコミユニケーションしか取れないのだろう、あまり痛くなかった故に気にしないことにした。

扉を出たところにいた夏侯惇に胸ぐらを掴まれ、「あまり調子に乗るなよっ」とドスの利いた声で脅された。すぐに解放されたが胸元が万力で締め付けられたかのように痛かった。

陣から出て少し歩いたところで地面に矢が刺さった。振り返ると夏侯淵らしき人物がこちらを見ていた、と思う。遠すぎてはつきりとは分からなかったがそんな気がした。

契約、反故にされるんじゃないかと心配になった。